

SUPPLEMENT TO GENES GENET.SYST. (2006) 81 (6) December 2006

GSJ コミュニケーションズ

PROCEEDINGS OF THE SOCIETY

大会ニュースその一 日本遺伝学会第79回岡山大会案内

- ◆香川大会委員長からの歓迎メッセージ
- ◆ミニシンポジウムのテーマと世話人の募集

惜別 大島長造先生のご逝去を悼む

黒田行昭

【特別寄稿】

ショウジョウバエの脳を詳しく調べる

伊藤 啓

●日本遺伝学会新役員の紹介●

会長挨拶 基礎科学としての遺伝学の振興を訴える

品川日出夫

幹事会ならびに評議員会の構成

第7回遺伝学談話会レポート

吉田貴徳

*植物の繁殖システムの進化遺伝学 (矢原徹一)

*活性酸素による核酸の化学修飾と様々な遺伝現象 (中別府雄作)

つくば大会ワークショップ

「高校での遺伝教育を考える」アンケート調査の取りまとめ 池内達郎

日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い

日本学術会議会員報告

斎藤成也

日本学術会議ニュースメールから

「年頭にあって」

金沢一郎会長

シンポジウム「知識社会における教師の科学的教養と教員養成」

**本
会
記
事**

- *新しい幹事会への伝言——新旧合同幹事会議事要録
- *第20回国際遺伝学会大会委員長との会見記 (館野義男)
- *日本遺伝学会第78回大会のデータ報告 (小幡裕一)
- *会員異動

GENETICS SOCIETY OF JAPAN (GSJ)

◆創立1920年◆

日本遺伝学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj3/index.html>

International Congress on Plant Mitochondrial Biology

(ICPMB2007)

Nara, Japan, June 25 – June 29, 2007

Second circular and previous announcement of registration

We wish to invite you to attend the International Congress on Plant Mitochondrial Biology (ICPMB2007), which will take place in Nara, Japan from June 25 through June 29, 2007.



Organizing Committee

Hirokazu HANDA - National Institute of Agrobiological Sciences (NIAS), chair
 Nobuhiro TSUTSUMI - University of Tokyo, co-chair
 Shin-ichi ARIMURA - University of Tokyo
 Koh-ichi KADOWAKI - NIAS
 Nobuya KOIZUKA - Tamagawa University
 Tomohiko KUBO - Hokkaido University
 Mikio NAKAZONO - University of Tokyo
 Atsushi SAKAI - Nara Woman's University
 Masahiro SAKAMOTO - Kyoto University
 Toru TERACHI - Kyoto Sangyo University

This announcement is addressed to researchers who had attended at the previous meeting in Obernai, France. If you wish to be removed from this list please contact organizers (ICPMB2007@nias.affrc.go.jp).

Circulate this to other parties who you think might be interested and if they wish to be added to the mailing list please also contact us.

国際植物ミトコンドリア科学会議 ICPMB 2007

欧米で隔年で行われてきたInternational Congress on Plant Mitochondrial Biologyを2007年、奈良で開催する運びとなりました。ICPMBは植物ミトコンドリアに関与する、生態、生理学、細胞生物学、分子生物学など、全てのアプローチの研究の発表を歓迎いたします。また葉緑体やペルオキシソームなど関連するオルガネラに関する発表も期待しています。

■日 時

6月25日(月)～29日(金)

■場 所

奈良女子大学

■参加費

一般：40,000円

学生：30,000円

■申し込み方法

ウェブページからオンライン登録

■参加申込締切

2007年3月20日まで

■発表方法

口頭発表、もしくはポスター発表

問合せ先

●e - m a i l ; ICPMB2007@nias.affrc.go.jp

●ホームページ ; <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/ICPMB2007/>

目 次

頁

	借別 大島長造先生のご逝去を悼む 黒田行昭	4
	会長挨拶 基礎科学としての遺伝学の振興を訴える 品川日出夫	6
	2007・2008年度日本遺伝学会幹事紹介	7
	2007・2008年度日本遺伝学会評議員名簿	8
	日本遺伝学会第79回大会へのお誘い 香川弘昭	9
	岡山大会案内その1 日本遺伝学会第79回大会案内	10
	日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い	12
	特別寄稿	
	ショウジョウバエの脳を詳しく調べる 伊藤 啓	17
	第7回遺伝学談話会レポート 吉田貴徳	21
	植物の繁殖システムの進化遺伝学 (矢原徹一)	
	活性酸素による核酸の化学修飾と様々な遺伝現象 (中別府雄作)	
	遺伝学会第78回大会	
	『ワークショップ：高校での遺伝教育を考える』を振り返って 池内達郎	23
	2006年度自然史学会連合総会議事録 (抜粋)	27
	◆日本学術会議会員報告◆ 斎藤成也	29
	<日本学術会議ニュース>	
	◇年頭にあって◇ 金澤一郎	30
	日本学術会議主催公開講演会	
	「知識社会における教師の科学的教養と教員養成」	30
	お知らせなど	
	神奈川科学アカデミー教育講座	5
	第10回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ	20
	第44回 アイソトープ・放射線 研究発表会 発表論文募集	32
	本 会 記 事	
	・幹事引き継ぎ会—新会長・幹事を迎えて	33
	・Rudi Balling 第20回ベルリン大会委員長との会見 (館野義男)	28
	・日本遺伝学会第78回大会報告 (小幡裕一)	22
	・会員異動	35
	GSJコミュニケーションズ4年間の歩み	37

編集まえがき ◆此の冊子をお届けするのは新年に入ってからですが、実際は06年度の幹事会編集担当の最終版となります。4年が過ぎましたが、この間、会員のメールアドレスをネットワークで結ぶダイレクト配信システムは十分ではなく、また学会ホームページもスタートしたばかりなので、会員間あるいは学会本部との交流の場を確保することが必要と私は判断しました。**[GSJコミュニケーションズ]**という名を山本和生氏(東北大)と相談して決めたのも、この思いからでした。様々な情報を会員に届けようと曲がりなりにも努力しました。なかでも、遺伝学への熱い想いを珠玉のエッセーに込めてご寄稿いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。◆さて遺伝学会に大きな足跡を残されました大島先生の訃報が突然正月早々に学会本部に伝えられ、悲しみと共に新年が始まりました。同門の黒田先生に追悼文をお願いできたことがせめてもの慰めです。大島先生にはかつて「日本遺伝学会と私の研究の関係」(04・8月号)と題した一文を本冊子にご寄稿いただいております。謹んでご冥福をお祈り致します。偶然ですが、同じショウジョウバエ研究者の伊藤啓氏に、彼の独創的な脳研究のご紹介をお願いしました。伊藤氏は残念ながら遺伝学会には今のところ入っていただけないのですが、多くの友人が会員におられ常に研究交流をされているので、会友と呼びたいと思います。◆本冊子の編集発行は新執行部に引き継がれ、とりわけ筆のたつ斎藤成也特別幹事が担当される運びとなりました。今後にご期待下さい。◆4年冊子作りを支えて下さいましたレタープレスの皆様に礼申し上げます。◆別れても響きあう心を大切に—石和貞男

大島長造先生のご逝去を悼む

国立遺伝学研究所 名誉教授 黒田 行昭

本学会名誉会員 大島長造先生が昨年暮れも押し迫った12月29日ご逝去されました。御年90歳。12月の下旬、お腹の調子が悪いとのことで病院で診察を受けられましたら、胃ガンが見つかり、すでに肝臓にも転移していて、手の施しようもなく、即刻ご入院されましたが、3日後にご逝去になりました。以前から心臓に不整脈があり心臓のペースメーカーを装着されており、最近はお足もお悪いようでしたが、普段はいたって元気でした。12月の初めに大阪のマンションにお電話した時も平生どおりで、その後も研究集会などにもお出になっていたようで、ご逝去されたという突然のお知らせで大変驚きました。ご親戚でご葬儀も済まされ、遺伝研の方に、今年の1月10日にご長男の方からご逝去のご連絡がありました。

先生は、1936年、大阪高校（旧制）理乙をご卒業後、京大理学部動物学科に入学され、駒井卓先生のご指導の下にクロショウジョウバエ群数種の雑種の唾腺染色体の研究をされ、ご卒業後大学院に進まれ1961年に理学博士の学位を習得されました。この間、1939年徴兵検査で甲種合格、翌年、兵庫県青野ヶ原の戦車第6連隊に入隊されました。その頃、日本は日支事変から太平洋戦争に突入した時代で、幹部候補生として陸軍少尉に任官され、さらに2年後には中尉に昇任されています。幸い留守部隊として内地に残られ終戦後の9月除隊されました。

戦後は、大阪医科大助教授を経て、1950年阪

大に遺伝学教室が新設され、農林省蚕糸試験所から赴任されました吉川秀男教授の下で、助教授としてショウジョウバエのDDT抵抗性の集

団遺伝学的研究を開始されました。私は京大の学生時代から先生をよく存じあげておりましたが、卒業と同時に阪大のこの研究室の助手として採用され、吉川先生の赴任されるまでの1ヵ年間は、大島先生と2人で研究室の設営や、ショウジョウバエの恒温飼育室の設置などに当たりました。大島先生は、阪大では TENTOUM シの翅の斑紋の研究やショウジョウバエの殺虫剤抵抗性の研究を進められました。

1957年に遺伝研に移られ、駒井卓先生のご後任の生理遺伝部長として致死遺伝子などの有害遺

伝子を対象としたショウジョウバエの集団遺伝学的研究を進められました。遺伝研では、最初の1年は Cold Spring Harbor の生物学研究所やコロンビア大学の Dobzhansky の研究室へ留学されました。22年間の遺伝研での研究では、ロックフェラー財団からの研究費や科学研究費などの援助を受けながら、コイトロンやアクトグラフなどの設備を作られ、ショウジョウバエの行動遺伝学や騒音に対する研究などをされました。また、1959年から遺伝学会の庶務、会計、編集などの幹事を6年間、評議員として8年間されたあと1977年からは会長を4年間務められました。1961年（昭和36年）9月に仙台で行われた本学会の第33回大会では、「昆虫の殺虫剤抵抗性の集団遺伝学的研究」に対して、



日本遺伝学会賞が授与されています。流動研究員や奨励研究員、特別研究生など韓国の留学生を含む日本各地からの新進気鋭の若い研究者と共同研究をしながら育てられ、その数は19名に達し、その中の8名は学位論文を完成されています。こうして、わが国におけるショウジョウバエの実験集団や自然集団の有害遺伝子や行動遺伝学の基礎を築かれました。

1979年、遺伝研をご退官後は、遺伝研の名誉所員として、小田原の見晴らしのよい丘の上に立つスマートなお宅から、大阪に移られ、上本町のご実家の跡地に新しいマンションを建て、その管理をかねて、そこから研究会や種々の会合などに出席されていました。大阪生まれの大阪育ち、浪速のボンボンであった大島先生は、若いときからダンディで、口にくわえた愛用のマドロスパイプから紫煙をくゆらすお姿が“さま”になりました。遺伝研では、大島研の研究室の女性の研究補助員は、いずれも美人ぞろいの評判が高かったようです。吉村公三郎監督、山本富士子主演の映画「夜の河」のヒーローのショウジョウバエを研究する若き研究者

のモデルにもなられました。また、1968年東京で開催されました第12回国際遺伝学会議では、3冊のProceedingsの編集を担当され、この時出された日本人遺伝学研究者1,000名の英文リスト Recent Activity of Japanese Geneticists には、研究者の生年、学位、所属機関名と所在地、自宅住所、研究分野、研究課題、所属学会、最終学歴まで網羅的に記載されていて、個人情報のプライバシーの厳しいこの頃では、とても考えられない記録となっています。

大島先生とは奥様を含めて、きわめて家族的なお付き合いをさせていただき、阪大時代の私の結婚式では、吉川先生がご媒酌人で、家内は京都のお医者さんで資産家の娘さんであった奥様の、手付かずのまだ一度も着用されていないしつけの着いた花嫁の白装束やお色直しの着物や帯までお借りして式を挙げました。終生関西弁で通され、なごやかな中にも厳しさを感じさせる大島先生の安らかなご冥福をお祈りいたします。

合掌

神奈川科学技術アカデミー 教育講座 受講生募集

基礎から学ぶ遺伝子実験コース

～集中実習・実験により基本的なバイオテクノロジーを習得しよう～

●カリキュラム編成者 東京工業大学大学院 生命理工学研究科 教授 医学博士 半田 宏

●コースの特色・ねらい

本コースでは6日間を費やして、みなさん一人一人に遺伝子のクローニングの操作を最初から最後まで通して行っていただきます。つまり、出発材料であるヒト培養細胞からの全RNAの抽出に始まり、RT-PCR（逆転写-ポリメラーゼ連鎖反応）による目的 cDNA（相補 DNA）の増幅、目的 cDNA のプラスミドベクターへの挿入、大腸菌形質転換体からの組換えプラスミドの調製、そして目的 cDNA の塩基配列の決定までを行います。この一連の操作は、現在の分子生物学の根幹を成す最も基礎的かつ重要な手技といえるでしょう。

●講 義 日 H19. 3/5～3/10 計6日間

●主なカリキュラム内容

【実習】 ヒト培養細胞からの全 RNA の調製／RT-PCR による目的 cDNA の増幅／アガロースゲルの作製／RNA および PCR 反応物のアガロースゲル電気泳動／目的 cDNA のプラスミドベクターへの組み込み／大腸菌の形質転換／形質転換体の計測／形質転換体の植菌／組換えプラスミド DNA の調製／DNA シークエンシング／結果の解析

【講義】 ケミカルバイオロジーの最前線／インターネットによる遺伝子情報の解析法／ゲノム医学の課題と最先端

●実 習 場 所 東京工業大学すずかけ台キャンパス（横浜市緑区長津田町）

●受 講 料 160,000円 KAST 法人賛助会員（事業所単位）・神奈川県内中小企業 128,000円

●申込締切日 平成19年2月9日（金） ●募集人員 25名

問い合わせ先および申し込み先 財団法人神奈川化学技術アカデミー 教育研修グループ

神奈川県川崎市高津区坂戸3-2-1 KSP 東棟1階（〒213-0012）

Tel (044)819-2033 Fax (044)819-2097

e-mail: ed@newkast.or.jp http://www.newkast.or.jp

基礎科学としての遺伝学の振興を訴える

品川 日出夫

遺伝学会会員の皆様新年おめでとうございます。今期思いがけず日本遺伝学会会長に選ばれました品川です。現在の私の置かれた状況で出来る範囲で2年間の任期を自分なりのやり方で務めさせていただきたいと思っておりますので、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

歴代の会長及び役員の方々の努力で、遺伝学会は近年多くの改革を成し遂げてきました。会員の皆様の協力を得て、これ等を完成させ、定着させることが今期の主要な目標と思います。学生会員の優遇や、大会における口頭発表の重視は出来る限り維持して行きたいと思っております。

学会は学術の交流と親睦のための団体であり、参加者の半分以上が懇親会に参加する良き伝統が維持されるよう配慮して行きたいと存じます。2007年度の岡山大会は香川弘昭大会長のもとで着々と準備が進められており、2008年度の名古屋大会は森郁恵大会長が構想を練っております。大会は遺伝学会の二大事業の一つで、大会委員会と学会本部の連携で良き伝統を守りつつ、斬新な企画もサポートしていきたいと考えております。

会員から大学生用の“本当の遺伝学”の教科書を作るべきだという提案もあります。人類遺伝学会から、国のゆとり教育の見直しを機会に高校の教科書の改訂に積極的に関与すべきという呼びかけが来ています。遺伝学の教育及び普及の担当幹事である池村幹事からゲノム解析の情報を生かすannotator育成のためにシニアの経験と知識を若い世代に伝承する制度を作るという大変興味ある提案があり、既に動き始めております。老壮若の叡智と活力によって対処していきたいと思っております。

学会誌の発行はもう一つの最重要事業です。これ迄 J-STAGE の協力で完成した Genes & Genetic System のインターネットを介した free access を守りつつ、遠藤編集長のリーダーシップで、投稿と編集の完全電子化が完成しようとしています。GGG のアーカイブの電子化も着々と進んで、free access と相まって、価値を高めています。特に GGG の review article に対するアクセスは非常に多く、会員の皆様のメモ代わりのように気楽に投稿していただけたら幸いです。外国の若手は必死で review を書いて、世界に認知度を高めようとしております。日本人は立派な研究成果を挙げているのに、この面で遅れをとって損をしているように思えます。

学会誌の発行はもう一つの最重要事業です。これ迄 J-STAGE の協力で完成した Genes & Genetic System のインターネットを介した free access を守りつつ、遠藤編集長のリーダーシップで、投稿と編集の完全電子化が完成しようとしています。GGG のアーカイブの電子化も着々と進んで、free access と相まって、価値を高めています。特に GGG の review article に対するアクセスは非常に多く、会員の皆様のメモ代わりのように気楽に投稿していただけたら幸いです。外国の若手は必死で review を書いて、世界に認知度を高めようとしております。日本人は立派な研究成果を挙げているのに、この面で遅れをとって損をしているように思えます。

遺伝学会は現在任意団体ですが、この形態が税制や会計監査などでいつ迄通用するかわかりません。学会の NPO（非営利団体）化も視野に入れた将来計画の検討を始める必要がありますので、皆様のお知恵をお借りしたいと思います。

遺伝学の健全な発展のために政府に働きかける良い意味での圧力団体としての機能も本学会の重要な任務です。幸い学会員に選ばれた遺伝学会員や連携会員も数名いますので、それらの方々と共に、基礎科学としての遺伝学の振興を訴えていきたいと思っております。

(2007年1月3日)

品川日出夫 しながわ ひでお

大阪大学名誉教授、招聘教授

大阪大学微生物病研究所 ゲノム動態研究グループ

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘3-1

Tel; 06-6879-8317 Fax; 06-6879-8320 E-mail: shinagaw@biken.osaka-u.ac.jp

バイオアカデミア（株）代表取締役社長

2007・2008年度日本遺伝学会幹事紹介



国内庶務幹事
真木 寿治

奈良先端科学技術大学院
大学バイオサイエンス研究科
DNA複製,突然変異の分子機構



渉外庶務幹事
五條堀 孝

国立遺伝学研究所
生命情報・DDBJ研究センター
進化学,バイオインフォマティクス



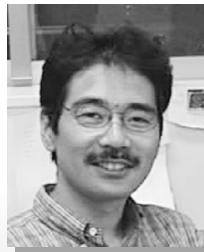
会計幹事
小林 武彦

国立遺伝学研究所
ゲノム再編成の分子機構



編集幹事
遠藤 隆

京都大学農学研究科
植物遺伝学(小麦の細胞遺伝学)



企画集会幹事
岩崎 博史

横浜市立大学大学院総合理学研究科
生体超分子システム科学専攻創成科学部門
DNA組換え修復機構



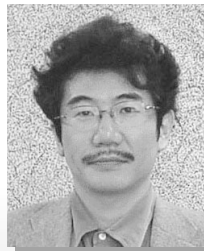
将来計画幹事
山本 博章

東北大学大学院生命科学研究科
動物発生遺伝学,
色素細胞の分化と機能発現機構



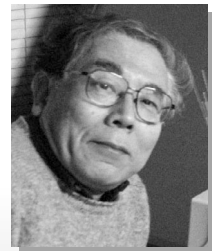
特別幹事
(男女平等参画推進担当)
松浦 悦子

お茶の水女子大学理学部
生物学教室
ミトコンドリアの遺伝学
(ショウジョウバエ)



特別幹事
(広報担当,ホームページ編集)
斎藤 成也

国立遺伝学研究所
進化学(ヒト及び霊長類の分子進化)



特別幹事
(遺伝学普及・教育担当)
池村 淑道

長浜バイオ大学 バイオサイエンス学部
バイオサイエンス学科 生命情報科学コース
ゲノム情報学,ゲノム進化学

2007・2008年度日本遺伝学会評議員名簿

会 長	品川日出夫	大阪大学微生物病研究所
評 議 員		
(全 国 区)	平野 博之	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
	堀内 嵩	基礎生物学研究所ゲノム動態研究部門
	井上 弘一	埼玉大学理学部
	河野 重行	東京大学大学院新領域創成科学研究科
	倉田 のり	国立遺伝学研究所
	森 郁恵	名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻
	仁田坂英二	九州大学大学院理学研究院生物科学部門
	舘田 英典	九州大学理学研究科
	田嶋 文生	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻
	高畑 尚之	総合研究大学院大学
(地 区)		
北 海 道 地 区	金澤 章	北海道大学大学院農学研究院
	鈴木 仁	北海道大学大学院地球環境科学研究院
東 北 地 区	石川 隆二	弘前大学農学生命科学部
	山元 大輔	東北大学大学院生命科学研究科脳機能遺伝分野
関 東 地 区	阿部 訓也	理化学研究所バイオソースセンター動物変異動態解析技術開発チーム
	篠崎 一雄	理化学研究所植物分子生物学研究室
東 京 地 区	小林 一三	東京大学大学院新領域創成科学研究科・メディカルゲノム専攻及び医科学研究所
	田村浩一郎	首都大学東京大学院理工学研究科生命科学専攻進化遺伝学研究室
中 部 地 区	石浦 正寛	名古屋大学遺伝子実験施設
	城石 俊彦	国立遺伝学研究所系統生物研究センター哺乳動物遺伝研究室
関 西 地 区	原島 俊	大阪大学大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学コース
	篠原 彰	大阪大学蛋白質研究所ゲノム-染色体研究室
中国・四国地区	香川 弘昭	岡山大学大学院自然科学研究科バイサイエンス専攻（理学部生物学科）
	村田 稔	岡山大学資源生物科学研究所
九 州 地 区	藤 博幸	九州大学生体防御医学研究所
	矢原 徹一	九州大学大学院理学研究院



日本遺伝学会第79回大会へのお誘い

第79回大会委員長 香川 弘 昭
(岡山大学大学院自然科学研究科・理学部)

日本遺伝学会第79回大会を、2007年9月19日(水)から21日(金)まで、岡山大学創立50周年記念館(津島キャンパス)を主たる会場として開催します。岡山地区を中心に中国四国の会員の協力を得て大会を準備しております。

岡山は、JRのホーム数が17に加えて、航空便は羽田からの国内便、ソウル経由の国際便も利用できる交通の便利な所です。岡山大学津島キャンパスは岡山駅からバスで10分、徒歩でも30分くらいの所で、9学部5研究科が集まり50周年記念館はそれらの中心にあります。

日本遺伝学会は国内学会の中でもっとも歴史ある学会の一つで、皆様ご存知の通り、これまで国際的な研究者も多数輩出しております。岡山での第9、27、44、67回大会を振り返ってみますと、多くの学部や分野の研究者が参加していた時期から、遺伝学の進歩と共に専門化と細分化された時期、そして分子レベルの研究が進展した時期へと目まぐるしく展開してきました。昨年の学会でわかるように、多くの生物で全ゲノムの塩基配列が決定され、G、A、T、Cの4字で書かれた普遍的なあるいは特殊な遺伝情報の解読が加速しております。

岡山での大会も、これまでの遺伝学会の特徴である口頭による一般講演を中心にプログラムを作成します。ただし今回はワークショップとシンポジウムを区別せずにミニシンポジウムとして世話人と課題を募集し、意義ある情報交換の場にしたいと考えております。若い人達への参加を奨励するため、学生・大学院生の大会参加費を無料とし、遠方からの学生・大学院生への旅費の一部援助も例年通り実施する予定です。また、“遺伝学の新しい潮流”を分かりやすく市民に伝えるため、大会に続いて市民公開講座を開催します。

大会の前後は国民の休日がありますので、太平洋から日本海まで四国3海、あるいは東西に関西から九州まで、時間のない人は岡山の後楽園、倉敷の美観地区やチボリ公園、吉備文化の史跡等を訪れる事も可能でしょう。新しい考えのきっかけを作るゆとりある大会を祈念し、皆様多数の参加をお待しております。



重 要 ミニシンポジウムのテーマと世話人の募集

- ・約8テーマ
- ・1テーマ持ち時間：2時間
- ・各テーマにおける演題数／発表時間：世話人に一任（4名～8名）
- ・発表者：世話人の指定する発表者と一般会員から希望を募り世話人が選択した者。
 1. 世話人：
 2. テーマ：
 3. テーマの概要とねらい（約200字程度）：
 4. 世話人の指定する発表候補者（世話人を含む）：
- ・締め切り：2007年3月30日(金)
- ・申込み方法及び申込み先：1～4を記載し、第79回遺伝学会準備委員会（E-mail：iden79@cc.okayama-u.ac.jp）へメールにて申込み

採択された約8テーマについてホームページ等で会員に案内し、一般会員の講演申込みに際し、ミニシンポジウムでの発表希望を伺います。

尚、テーマの採択については、準備委員会に一任願います。

日本学術振興会支援の国際研究集会「Gene expression control and Genome evolution」が併行して開催される予定です。

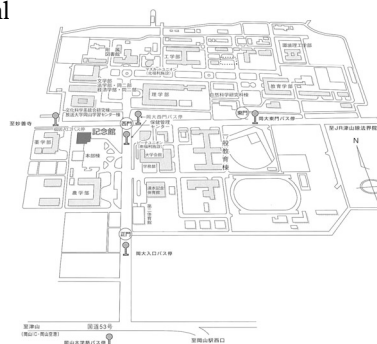
日本遺伝学会第79回大会案内

2007年の第79回大会は岡山大学50周年記念館（津島キャンパス）を会場に下記のような企画で準備を進めています。カレンダーに下記の日程をメモしてください。第79回大会について企画および提案がございましたら、準備委員会事務局 iden79@cc.okayama-u.ac.jp までご連絡下さい。

1. 会 場： 岡山大学創立50周年記念館および理学部
(岡山市津島中 3-1-1)
2. 会 期： 2007年 9 月19日(水)・20日(木)・21日(金)
3. 企 画： 一般講演 9月19日(水) 午前・20日(木) 午前・21日(金) 午前
ミニシンポジウム 9月19日(水) 午後、夜・21日(金) 午後
特別講演会・総会・受賞講演等 9月20日(木) 午後
懇親会 9月20日(木) 夜
市民公開講座 9月22日(土) 午後
4. 関連集会： 大会中、またはその前後に関連集会を予定される方は2007年 3 月30日(金) までに
集会名・期日等を準備委員会事務局へE-mail にてご連絡下さい。
iden79@cc.okayama-u.ac.jp
5. 参加・講演申込：
参加・講演申込は例年にならってホームページからの申込とし、締め切りは2007年
7 月 2 日(月)の予定です。
詳細は次回以降の大会ニュースでお知らせします。
第79回大会ホームページ：<http://www.okayama-u.ac.jp/user/iden79/>
6. 日本遺伝学会第79回大会準備委員会：
大会委員長：香川弘昭
岡山大学大学院自然科学研究科（理学部）
E-mail: hkagawa@cc.okayama-u.ac.jp
大会プログラム委員長：上田 均
岡山大学大学院自然科学研究科（理学部）
E-mail: hueda@cc.okayama-u.ac.jp
7. 連 絡 先： 岡山大学大学院自然科学研究科（理学部）
電話：086-251-7864
ファックス：086-251-7876
E-mail: atomi@cc.okayama-u.ac.jp
8. 地 図： <http://www.okayama-u.ac.jp/jp/access.html>



岡山大学創立50周年記念館



大学へのアクセス

バスの時刻表は下記の各社ホームページでご確認ください。

岡電バス（JR 岡山駅より津島、鹿田キャンパス及び東山地区へ）

中鉄バス（岡山空港より津島キャンパス及びJR岡山駅へ）

岡備バス（JR 岡山駅より平井地区へ）

〈岡山まで JR 利用〉

- 岡山駅前から岡電バス「岡山大学・妙善寺」行に乗車、「岡大東門」、「岡大西門」又は「福居入口」で下車。

- 岡山駅前から岡電バス「津高営業所」行に乗車、「岡山大学筋」で下車、徒歩約7分。

※上記2路線は市内を廻るため時間がかかります。

- 岡山駅西口から岡電バス「岡山大学・岡山理科大学」行に乗車、「岡大入口」、「岡大西門」、「福居入口」又は「岡大東門」で下車。

※本線は時間帯により「岡大東門」には停車しない場合があります。なお、「岡大東門」へはキャンパス外周を廻った後に到着します。

→バス時刻表は[こちら](http://www.okayama-kido.co.jp/bus/) <http://www.okayama-kido.co.jp/bus/>

- 岡山駅西口からタクシー 約7分。

- JR 津山線「法界院」駅で下車 徒歩約10分。

〈岡山まで航空機利用〉

- 岡山空港から中鉄バス「岡山市内方面」行に乗車、「岡山大学筋」で下車、徒歩約7分。

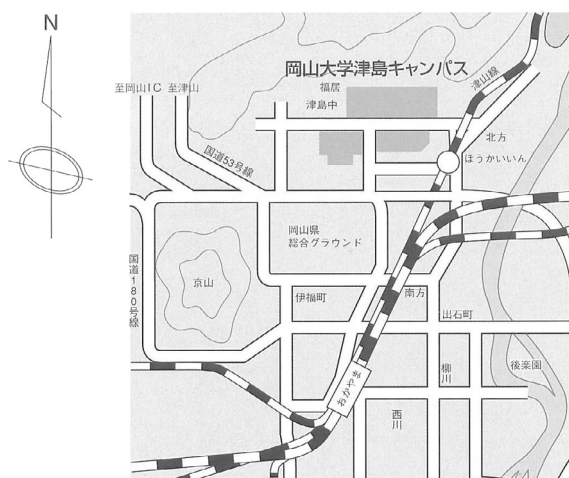
→バス時刻表は[こちら](http://www.chutetsu-bus.co.jp/) <http://www.chutetsu-bus.co.jp/>

〈岡山まで山陽自動車道利用〉

- 岡山ICで降り、岡山市内方面へ国道53号線を直進、右手に岡山県総合グラウンドの木々が見え始めたら約600メートルで岡山大学筋があります。左折すれば岡山大学に着きます。



岡山市内キャンパス等位置図



日本遺伝学会木原賞および奨励賞候補者推薦のお願い

下記の規程に添って2007年度木原賞および奨励賞候補者推薦をお願いします。

なお、木原賞候補者を推薦される方は、もし被推薦者が受賞者となられた場合は、当学会誌 Genes and Genetic Systems に英文総説を執筆されますようお願い下さい。

また奨励賞につきましては、自薦できるようになっております。

【推薦書作成要領】

本誌に掲載された様式に従って作成して下さい。なお、同様式は遺伝学会ホームページからダウンロードしていただけます。いずれも用紙はA4判を使用して下さい。

(木原賞) 候補者の主な発表論文のリストを別紙にて作成し、うち主要な論文5編3部ずつを添付して下さい。

(奨励賞) 1. 候補者の主な発表論文のリストを別紙にて作成し、うち主要な論文2編3部ずつを添付して下さい。

2. 候補者は原則として40歳以下の会員です。

3. 自薦の場合も同様式に従って作成して下さい。

【提出期限】

2007年5月31日(木) 必着

提出先: 〒411-8540 三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内
日本遺伝学会 Tel & Fax 055-981-6736

日本遺伝学会会長 品川日出夫

日本遺伝学会学会賞および奨励賞に関する規程(抜すい)

(目的)

遺伝学の進歩を促し、すぐれた研究業績を一般に知らせるために学会賞および奨励賞を設定する。

(賞の種類)

1. 日本遺伝学会木原賞

遺伝学の分野ですぐれた業績をあげた者(原則として会員)に授与する。

2. 日本遺伝学会奨励賞

遺伝学の特定の分野ですぐれた研究を活発に行い、将来の成果が期待される比較的若い研究者(原則として40歳以下の会員)に授与する。

(賞の内容)

1. 日本遺伝学会木原賞

賞状、メダルおよび副賞としての賞金からなる。

2. 日本遺伝学会奨励賞

賞状および副賞としての賞金からなる。

(賞の選考)

賞の選考は下記に定められた選考委員会と選考方法によって行う。

1. 選考委員会

全会員を対象として評議員会により選出された若干名と、これに会長が加わり、選考委員会を構成する。会長以外の選考委員は任期を2年とし、連続して2期(4年)をこえ選考委員としてとどまることはできない。

選考委員会の委員長は会長がつとめるものとする。

2. 選考方法

会員から推薦された候補者について選考委員が慎重に審査を行い、受賞者を決定した上で評議員会の承認を得るものとする。日本遺伝学会木原賞受賞者については原則として毎年1名とするが、適当な候補者がいない場合は授賞は行わないものとする。

日本遺伝学会奨励賞については毎年2名以内を選ぶものとする。

附 則

昭和57年11月20日 日本遺伝学会総会承認

昭和60年10月14日 一部改正

昭和63年2月6日 一部改正

1989年10月14日 一部改正

1992年10月23日 一部改正

2005年4月4日 一部改正

(様式) 2007年度日本遺伝学会木原賞候補者推薦書

2007年 月 日

推 薦 者	
(ふりがな) 氏 名	印
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

受 賞 候 補 者	
(ふりがな) 氏 名	(西暦) 年 月 日生
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

【略 歴】

(様式) 2007年度日本遺伝学会奨励賞候補者推薦書

2007年 月 日

推 薦 者 (自薦の場合、職名、連絡先は不要)	
(ふりがな) 氏 名	印
職 名	
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:

受 賞 候 補 者		
(ふりがな) 氏 名	(西暦) 年 月 日生	
職 名		
連 絡 先	〒 TEL: FAX: E-mail:	

【略 歷】

【遺伝学会における活動歴】



ショウジョウバエの脳を詳しく調べる

伊 藤

啓 (東京大学分子細胞生物学研究所)

キイロショウジョウバエの研究者は、既知あるいは新規発見の遺伝子の解析を研究テーマにしている人が多い。私はその中で珍しく、遺伝子にはほとんどタッチせずに研究を続けてきたものだから、なかなか遺伝学会で提供できるような話題がなかった。しかし、学生の頃から長年お世話になっている石和先生からご依頼をいただいたとなれば、そうは言っておられない。多少場違いな内容になりかねないが、この機会をお借りして、自分の研究を簡単に紹介させていただきたい。

§ 神経をラベルするツール

私が脳の研究を始めたいと思った1980年代の中頃は、第五世代コンピューターという人工知能プロジェクトが一斉を風靡していた。しかし生物の脳のようにフレキシブルでエラーに強い、本当の意味での「キカイの脳」を作るには、実際の生物の脳神経回路の仕組みをもっときちんと知ることが大切だろう。とはいえ、ヒトやサルのようにあまりに複雑精緻な脳では、その全貌の片鱗を知ることすら難しい。当時は（今もそうであるが）全神経回路がほぼ分かっている生物は線虫しかなかったから、それよりも一回り複雑で、いちおう「脳」らしき構造体を持つ生物として、ショウジョウバエを調べるのが魅力的に思われた。

だが、小さいといってもショウジョウバエの脳には全部で約10万の細胞がある。ゴルジ染色やモノクローナル抗体のスクリーニングといった従来からの方法では、様々な神経を効率よく染め分けて、回路を体系的に同定してゆくのは難しい。これを解決したのが、1990年代初めに開発された GAL4 エンハンサートラップ法だった。この方法では、酵母の転写調節因子 GAL4 をトランスポゾンを用いてゲノムに1ヶ所挿入し、近傍のエンハンサーの活性に従って発現させる。このハエと、GAL4 の標的配列 UAS の下流にクラゲの蛍光タンパク GFP など任意の遺伝子をつないだ組替えDNAを持つハエとを掛け合わせると、次世代の個体では細胞特異的な GAL4 の発現に合わせて好きな遺伝子を発現させ、細胞をラベルしたりその機能を改変したりできる。

ドイツの G. Technau 博士の研究室でポストドクをやっていた1991～94年に、私は当時開発されたばかりのこの方法で約330系統をスクリーニングし、中枢神経系の様々なグリア細胞を染め分けて網羅的な同定と分類を行った。しかし、グリアよりも複雑で多様な脳神経回路を染め分けるには、少なくとも数千単位の系統をスクリーニングする必要がある。そこで、三菱生命研



の山元大輔博士から ERATO プロジェクトの研究員に参加しないかとお誘いをいただいたときに、より大規模な系統作成の計画を提案した。

だが、これには膨大な作業が必要なうえ、せっかく作った系統を脳の研究だけに使うのも効率が悪い。そこで、群馬大の吉原基二郎、三菱生命研の上田龍、神経センターの松崎文雄・中越英樹、都立大の相垣敏郎、遺伝研の林茂生、京都大の上村匡、九州大の谷村禎一の各博士らと語らって、合計8つのグループが集まってコンソーシアムを組織した。各グループが500系統のノルマを作成したら、他と合わせて合計4000系統を手に入れることができるという仕組みである。研究テーマが重ならないようなメンバーを集めることにより、どのグループが作った系統でも、お互いに完全に自由に利用できるようにした。現在ではそれぞれ偉くなっているこれらの方達も、当時は助手や研究員のレベルが多く、各自が使える予算や人員には限りがあった。若手の研究者が個人ではできないような大規模なプロジェクトが、コンソーシアムを作ることによって実現できたわけである。

ニッポンから名を取ってNPと名付けた系統群は、準備段階を含めて1995年から98年まで延べ4年を費やして完成し、各グループがそれぞれのテーマでスクリーニングを進めた。遺伝研では林博士と後藤聡博士らの尽力で、各系統の GAL4 挿入部位を同定した。その後京都工芸繊維大にストックセンターが設立されたのに伴い、作成した系統の大半を寄託して、コミュニティーの共有財産として広く公開していただいている。

§ 脳内の神経回路の解析

こうして多様な神経細胞を染め分ける手段は確保できたが、どの系統でどのような細胞が染まるのかは分からない。そこでこれらの系統で片端から GFP を発現させて、脳でラベルされる細胞を共焦点顕微鏡で撮影し、1999年から2001年まで3年を費やして約13万枚にのぼる画像データベースを作成した。これでやっと、(1)ある脳領域の神経回路がラベルされる系統を画像データベースから検索し、(2)その系統を使って様々な遺伝子を発現させて神経線維やシナプスの分布を可視化し、(3)三次元画像処理によって回路の形態を解析する、という研究に必要なツールが揃った。

複雑に絡み合った神経回路を体系的に調べるには、視覚・嗅覚・味覚・聴覚などの感覚種ごとに、感覚細胞から一次中枢、二次中枢と情報の流れを辿りながら、段階を追って解析を進める必要がある。たとえば嗅覚系では、触角にある約1200個・50タイプの嗅細胞が、一次嗅覚中枢である触角葉の50個の糸球体にタイプ別に投射しており、多様な分子の混合物である「匂い」が、一次中枢では「どの糸球体の活動が活発化しているか？」という機能マップとして表現されていることが分かっていた。そこで次のステップとして、一次中枢から伸びる投射神経の様々なサブセットをラベルする系統を選び、個々の糸球体からの情報が二次中枢の内部へどのように伝えられるのかを調べた。その結果、キノコ体と側角という2つの嗅覚二次中枢は、どちらも数個のゾーンにしか分かれておらず、各ゾーンにはそれぞれ特定の糸球体のセットからの神経が、重複して投射していることが分かった。

次に二次中枢の神経をラベルしてみると、側角ではこれらの神経の分枝は個々のゾーンの範囲内に局限しており、そこから脳の別々の領域へと投射していた。従って、側角経由で嗅覚情報を受ける高次脳領域は、ひとつのゾーンに収斂して投射する特定の糸球体群からの情報、つまり特定のセットの嗅細胞群が検知した匂い情報だけしか統合できないような構造になっていた。

一方キノコ体では、二次中枢の神経の分枝はゾーンの境界をまたいで広がっており、この経路で嗅覚情報を受ける高次脳領域は、全ての嗅細胞からの情報を統合しようような構造になっていた。行動実験の結果から、側角は定型的な匂い弁別と応答、キノコ体は匂いと電気ショック等との連合学習にそれぞれ必須であることが分かっているが、こうした機能の違いと嗅覚情報の統合様式の違いに、一定の対応関係が見られた。

視覚系では、複眼に映る景色は約800個の個眼によって800画素の明暗分布として検知され、一次視覚中枢である視葉の800個のコラムに伝達される。景色は「どのコラムの活動が活発化しているか？」という機能マップで表現されているわけである。そこで、視葉と高次視覚中枢を結ぶ投射神経を同定して詳しく調べてみると、コラム単位の情報を伝える経路は少なくとも8経路あり、視葉では単一だったマップが、複数の高次中枢に重複して射影していることがまず分かった。一方で、1経路あたりの神経は30～150個程度とコラムの数よりずっと少なく、個々の神経は隣接する複数のコラムに広がっていた。投射神経が低次中枢を発するレベルで、視覚情報はすでにある程度統合されてしまっているのである。

低次中枢の単一のマップが高次中枢では複数のマップに射影されていること、その段階で情報の収斂が生じ、分解能が大きく減少していることは、嗅覚系でも視覚系でも共通である。またこれらの投射神経と別に、1つの神経が多数の糸球体やコラム全体に枝を伸ばして情報を集め、高次中枢に伝えるような経路が多数存在する点も両方で共通している。しかし、視覚系ではこうした神経が投射する場所はコラム単位の情報が送られる場所とは重ならないのに対し、嗅覚系では糸球体単位の情報が送られる2つの主要中枢にもこれら全体的な情報が重複して送られる一方で、それ以外の10近い脳領域にもこの種の情報が送られている。このような視覚系と嗅覚系の類似点・相違点がどのような意味を持つのかは、さらに高次の神経を辿って、その先の情報の流れを理解しないと解釈できないだろう。また、解析が遅れている味覚や聴覚に関しては、感覚器官から一次中枢へのマップが解明できた段階であり、二次以降の高次中枢の解析はこれからである。視覚や嗅覚と同程度にまで解析を深めて、様々な観点から比較を行いたいと考えている。

§ 青い鳥

研究というのは面白いもので、解析を進めるうちにひょんなところから研究の線がつながることがある。前述のように、GAL4を使った最初の解析ではグリア細胞の同定と分類を行ったのだが、私の研究室で栗崎健博士が「いったん出来た神経結合は、回路の再構成の際にどのようにして消えてゆくのか？」を調べたところ、再構成はグリア細胞が軸索の一部を選択的に食べることで実現していることが分かった。また加藤健太郎博士が成虫脳での神経幹細胞の増殖を調べようとしたところ、増殖するのはグリア細胞だけであり、その増殖は神経のプログラム細胞死に連動して起こることが分かった。グリアの解析など全く想定していなかったにもかかわらず、グリア細胞の新たな機能の発見に何度も行き着いてしまうのである。

また、私がNPの系統を作成したのは山元大輔博士の研究室に所属していたときだったが、山元博士の研究室を離れて何年も経ってから、実は4000もの系統の中でごく最初の頃に作った21番という系統が、山元博士が長年研究していた *fruitless* 遺伝子座に挿入を持ち、*fru* 発現細胞をラベルしているのを見つけた。さっそく、*fru* を引き続き解析していた山元博士と木村賢一博士に知らせ、これが端緒になって雌雄差のある神経回路の発見などの画期的な研究につながっている。ひとつ恩返しのできた思いである。

§ 分子生物学的手法を活用するには

ここで紹介したような研究アプローチには、残念ながら他の生物にはほとんど応用できないという大きな欠点がある。大量のエンハンサートラップ系統を作成し、一度ジャンプさせたトランスポゾンを実定に保持したり、幾つもの組替え DNA を合わせ持つ個体を簡単に作ったりできるのは、目視で識別できる各種の優性マーカー変異やバランサー染色体など、私が生まれる前から完成されていたような遺伝学技法の蓄積があればこそである。組替え DNA という言葉もなかった時代の遺伝学の研究が、分子生物学を駆使した今のショウジョウバエ研究を支えているのである。

トランスポゾンを用いたエンハンサートラップや、GAL4 等による遺伝子発現誘導、GFP 等

の発現を用いた細胞の可視化などのモダンな分子生物学的手法は、他の生物でも盛んに応用が進められている。しかしこうした新しい技術を真に使いこなすのに不可欠なはずの古典的な遺伝学技法の整備は、「最先端の研究」とは見なされないためか、あまり活発でないように感じられる。極端な言い方をすれば、注目を浴びる蛇口ばかりを作って、人の目に触れない水道管の敷設はなおざりにされているような感もある。ショウジョウバエだけが持つ古典遺伝学的ツール群の恩恵をフルに享受している私としては、同じようなツールを他の生物でも実現するような地味な遺伝学研究に、もっと光が当たれば良いのと思う。■

第10回マリンバイオテクノロジー学会大会開催のお知らせ

第10回マリンバイオテクノロジー学会大会を下記の要領で開催予定としております。

- 大会日程** 平成19年5月26日(土)～27日(日)
- 会場** 山形大学小白川キャンパス教養教育棟
- 大会役員** 大会会長 森澤 正昭 山形大学理学部教授
大会副会長 原 慶明 山形大学理学部教授
実行委員長 木島 明博 東北大学大学院農学研究科教授
- 大会事務局** 〒990-8560 山形市小白川町1-4-12
山形大学理学部生物学科内
第10回マリンバイオテクノロジー学会大会実行委員会
TEL/FAX 023-628-4612, -4613 / 023-628-4625
Mail marbiotech@sbiol.kj.yamagata-u.ac.jp
- 懇親会場** 開催日 5月26日(土) 18:00～20:00
山形大学小白川キャンパス厚生会館
- 大会の内容** 1. 一般講演(口頭発表, ポスター発表), 2. シンポジウム(一般), 3. 懇親会
※ シンポジウムの企画を公募いたします。シンポジウムの企画をご希望の方は大会事務局までご連絡下さい。
- 発表形式** 1. 口頭発表: 一般講演は質疑含み15分, 液晶プロジェクター使用
2. ポスター発表: 学生を対象とした優秀ポスターの表彰を予定
- 一般講演のセッション**
1. 微生物, 2. 微細藻類, 3. 海藻・付着生物, 4. 魚介類, 5. 天然物化学・未利用資源,
6. バイオミネラリゼーション, 7. マリンゲノム, 8. 環境・環境適応, 9. その他
- 発表申込の締め切り** 平成19年3月16日(金) 必着
- 発表要旨の締め切り** 平成19年4月20日(金) 必着
- 講演申し込み方法**
発表希望の方は書式にしたがって、申込者氏名・所属および連絡先、発表希望セッション、希望発表形式、発表者氏名・所属略記(連名の方全員)、演題を明記の上、申し込んで下さい。申し込みはメールまたは郵送で受け付けます。詳細は大会ホームページでご確認下さい。
- 参加登録方法**
参加登録希望の方は書式にしたがって、申込者氏名・所属および連絡先を明記の上、メールまたは郵送で申し込んで下さい。詳細は大会ホームページでご確認下さい。

第10回大会ホームページアドレス: <http://www.sbiol.kj.yamagata-u.ac.jp/~jsmb/mbt2007/>

学会ホームページ: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsmb/>

第7回 遺伝学談話会レポート

日 時：平成18年11月28日

場 所：九州大学病院地区

植物の繁殖システムの進化遺伝学

講 師：矢原 徹一

活性酸素による核酸の化学修飾と様々な遺伝現象

講 師：中別府雄作

世話人：館田 英典

報 告：吉田 貴徳（九州大学大学院・理学府修士1年）



今回で7回目となる遺伝学談話会が、去年の11月28日、九州大学の病院地区で開催されました。私は、会場設営等のお手伝いをするとともに、お二人の講演者の発表を興味深く拝聴しました。学生の私の目から見て、講演で興味を惹かれた点や、当日の会場の様子等についてレポートします。

最初に、九州大学理学研究院生物科学部門の矢原徹一先生が『植物の繁殖システムの進化遺伝学』というテーマで講演されました。講演のはじめから、ヤシャブシやホオノキ、ハナイカダなど、多様な繁殖戦略をみせる野生植物の写真が私の目を引きつけました。講演では、最近の分子生物学的研究技術の進歩により明らかになってきた、植物の繁殖戦略についての研究成果が紹介されました。植物と送粉昆虫の間のコンフリクトにより進む共進化、病原性ウイルスと植物の軍拡競争、また野生植物の雑種集団における、協調して働く形質群（シンドローム）の進化など、様々な話題が飛び出しました。中でも私が興味を引かれたのは、ハマダイコンという植物を用



矢原 徹一氏

いた、雄性不稔遺伝子進化についてのトピックスです。ミトコンドリアDNA上の雄性不稔遺伝子が、自身の遺伝子頻度を増すように働き、正常型の遺伝子と競合するという刺激的な話です。また、ミトコンドリアゲノムとDNAゲノムとの間にも、繁殖戦略の上での対立が生まれるそうです。これら一つの種の中で起こる遺伝子どうしのコンフリクトや、それを通して進化していく植物の姿に、好奇心をかき立てられました。また、ハマカンゾウとキスゲという二つの野生植物を用いた送粉システムの進化を調べた話も、大変面白かったです。ESTライブラリの作成やF1、F2世代の育成により、実際の植物の形質と遺伝との関わりを明らかにしようという研究に大きな興奮を覚えました。講演を通して私が感じた植物の進化遺伝学的研究の魅力は、実際の生物が見せる多様な姿に、分子生物学的手法が分け入っていき、その多様性を生み出す要因を探ることができる点でした。

二番目に、九州大学生体防御医学研究所の中別府雄作先生が『活性酸素による核酸の化学修飾と様々な遺伝現象』というテーマで講演されました。そもそも DNA 分子中に起こる突然変異はどのように誘発されるのか、また、これらの突然変異がもたらす癌などの病気、そしてヒトゲノムの多様性とどのように関係するのかなどについて、とても興味深い講演を聞くことができました。ゲノム DNA やその前駆体のヌクレオチドは、酸素呼吸の過程で発生する活性酸素や、防御のために生体作りだす活性酸素によって酸化され、様々な酸化的化学修飾を受けます。この酸化損傷が修復・除去されないと突然変異を引き起こし細胞のがん化の原因ともなるのです。今回は、実験的アプローチが可能な 8-オキシグアニンや 2-ハイドロキシアデニンといった酸素が 1 つ付加された酸化塩基が生体に及ぼす影響について、豊富な実験例を示しながらお話していただきました。これらの酸化塩基はある程度きちんと塩基対を作るために、突然変異を引き起こしてしまうのです。私たちの体の細胞一つにつき、1 万個ほどの 8-オキシグアニンが常にあるという話を聞いたときには、何ともいえない不思議な感じがしました。また、染色体上に 8-オキシグアニンニの密度の高い部分と低い部分が存在するという統計データには強く興味を引き立てられました。そしてその頻度分布が、組み換え率の分布に非常に近いことが示されたときにはまたもやびっくりしてしまいました。なぜ 8-オキシグアニンが集中的に存在する領域があるのか、それがどのように組み換えを促進しているのか、興味のつきない話題でした。「生物は酸素を利用しているが、逆に生物の進化は、酸素に支配されているのではないか」という言葉が印象的でした。



中別府雄作氏

今回の談話会は火曜日の午後と言う時間帯でしたが、多数の参加者が集まりました。会場は九州大学病院地区内のコラボステーションという新しくきれいな建物の視聴覚ホールでした。全体的に学生等の若い方が多く、どちらの講演にも活発な質疑応答が飛び交いました。本会の終了後は懇親会があり、講演者や学生等が楽しく交流する機会も設けられました。私にとっては、興味深い講演を 2 つも聞き、懇親会で参加者の方と交流しながらおいしいお寿司まで食べることのできた、大満足な 1 日でした。■

本 会 記 事 から

◆日本遺伝学会第78回大会報告◆

日本遺伝学会第78回大会委員長 小幡 裕一

会 期：2006年9月23日（土・祝）～27日（水）

会 場：つくば国際会議場（茨城県つくば市竹園）

1) 参加者数

大 会 参 加 者 (一 般)	285名
大 会 参 加 者 (学 生)	121名
公開市民講座, NBRP シンポジウム, ワークショップ (高校教育) 参加者	410名
合 計 (のべ人数)	816名
懇 親 会 参 加 者	260名

2) 演 題 数

一 般 講 演	185題
シ ン ポ ジ ウ ム	23題
ワ ー ク シ ョ ッ プ	42題
受 賞 講 演	1題
N B R P シ ン ポ ジ ウ ム	25題
合 計	276題

3) 会計報告

収 入	金 額	支 出	金 額
遺伝学会より	1,000,000	会場費	3,267,077
参加費	2,254,000	会場設備費	1,093,914
懇親会費	1,200,000	懇親会費	1,039,415
予稿集代金	13,500	招待講演者旅費	497,660
協賛金・企業展示	3,922,500	印刷費	763,350
雑収入	1,033	通信費	471,489
		会議費	315,703
		事務局諸経費	442,425
		遺伝学会返金	500,000
計	8,391,033	計	8,391,033

4) その他

- ・ 遺伝学に対する一般市民の理解を得るために企画した公開市民講座や特別企画については、地元のマスメディア等を通して、広報活動をより積極的に行う必要がある。
- ・ 日本遺伝学会のロゴマークの設定が望まれた。予稿集、大会のポスターや送付用の封筒等に使用することにより、本学会の存在を強くアピールできると思われる。

『ワークショップ：高校での遺伝教育を考える』を振り返って

遺伝学の教育と普及に関する特別委員会委員

池内 達郎

▼世話人：池内 達郎（東京医科歯科大学）、向井康比己（大阪教育大学）

▼趣 旨：

昨年本学会に新設された「遺伝学の教育と普及に関する特別委員会」（委員長：武部啓先生）の活動の一環として、昨秋の公開講演会「遺伝をプラスイメージに：教育の重要性」につづき、今回は学会員を対象としたワークショップを企画する。一般社会の人々に遺伝学リテラシーを根付かせるための原点は学校教育にある。とくに「遺伝」現象を科学的に学ぶ高校「生物」（とくに「生物Ⅰ」）が重要であるが、80年代からの「ゆとり教育」の基に授業時間数が減ったのに伴い、学習内容の低減化（例えば近年の生命科学の進展が教科書に反映されていない、「ヒトの遺伝」や突然変異の用語が消えた、など）が著しいなど、現場は極めて憂慮すべき状況にある。本ワークショップでは、高校「生物」の現状を紹介し、ゲノム時代といわれる21世紀に相応しい遺伝教育のあり方や、高校「生物」の「遺伝」に関するミニマルエッセンシャルは何か、などについて議論を深める機会を提供したい。



池内 達郎氏

▼演者と演題：

- ・阿知波哲夫（六甲高等学校）：高校「生物」の教育現場からの遺伝教育についての提言。
- ・颯田 葉子（総合研究大学院大学）：「遺伝／進化」の教育の意義に関する私見。
- ・池内 達郎（東京医科歯科大学）：高校「生物」における「ヒトの遺伝」のあり方。
- ・小林 悟志（情報・システム機構 新領域融合センター）：遺伝学教育に活用しよう「新世代バイオポータル」。

高校「生物」の教育現場からの遺伝教育についての提言

○阿知波哲夫¹（¹六甲高等学校）

高等学校生物Ⅰは、現行の教育課程の中で、必修科目でなくなってしまった結果、履修率が低下した。さらに深刻な問題は、高校生がマスメディアなどを通じて関心を持っている遺伝子のはたらき、突然変異や進化の記述がほとんど生物Ⅰにない状態で、遺伝教育が行われていることである。本ワークショップでは、「遺伝学の教育と普及に関する特別委員会」の懇談会に参加させて頂いた一高校理科教諭として、教育現場での経験を紹介しながら、生物学や生命科学の体系の中における遺伝学の位置づけや、「遺伝子の時代」に生きる高校生のニーズに応える遺伝教育のありかたについて提言したい。

「遺伝／進化」の教育の意義に関する私見

○颯田 葉子¹（¹総合研究大学院大学 先導科学研究科 生命体科学専攻）

我々の生活の中で「遺伝」「遺伝子」「ゲノム」あるいは「進化」といった言葉を頻繁に耳にするようになっていく一方で、これらの分野の知識が十分に一般市民に浸透しているとは言えない。遺伝学が生物としてのヒトを理解するうえで重要な手がかりの一つであり、そのような知識は次世代の持続可能な社会の建設にも大いに資することができる。教養としての遺伝や進化の知識を身につけることのできる機会はいくつもの人にとって高等学校での「生物」の授業であろう。教養としての遺伝を身につけることの意義等にも触れながら、高等学校での「遺伝」や「進化」の教育でどのようなことを伝えて欲しいか、或は何を伝えるべきかに関する私見を述べる。

高校「生物」における「ヒトの遺伝」のあり方

○池内 達郎¹（¹東京医科歯科大学 難治疾患研究所 ゲノム応用医学）

近年、高校生物の教科書から「ヒトの遺伝」が後退している。とりわけ2003年度から始まった新学習指導要領の下では「変異」の語が消えたので、多くの高校生が学ぶ「生物Ⅰ」の教科書で、突然変異の概念や遺伝疾患が扱えなくなった。「ヒトの遺伝」教育でとくに重要な点は、ヒト集団の遺伝的多様性と多様な変異のひとつである遺伝疾患についての理解を深め、分け隔てのない共存の心を育くむことにある。「ヒトの遺伝」についての正しい理解は、自分自身の生物学を知り、健全な生命観／社会観を養う上でも大切なことで、学校教育の中では不可欠な課題である。その実践に向けて、高校の先生達と遺伝学の専門家との連携が必要となる。

遺伝学教育に活用しよう「新世代バイオポータル」

○小林 悟志¹, 川本 祥子¹, 北本 朝展³, 伊藤 武彦⁶, 宮崎 智⁵, 武田 英明², 阿部 貴志⁴, 菅原 秀明⁴, 五条堀 孝⁴, 藤山秋佐夫^{1,2}

(¹ 情報・システム機構 新領域融合センター, ² 国立情報学研究所 情報学プリンシプル研究系, ³ 国立情報学研究所 コンテンツ科学研究系, ⁴ 国立遺伝学研究所 生命情報・DDBJ 研究センター, ⁵ 東京理科大学 薬学部 薬学科, ⁶ 三菱総合研究所 先端科学研究センター 物質・生命科学研究チーム)

近年, 学校教育では遺伝学用語を含む多くの専門用語が生物学から省かれている。一方マスメディアから発信される科学情報には学校教育では学習しない専門用語が増加し, 益々先端科学と学校現場の乖離が進行している。我々が構築運営している「新世代バイオポータル」は一般社会と専門家との相互理解の架け橋となることを目指した Web サイトであり, 遺伝学用語はもとより学校教育では習わない生物学の基礎知識を網羅し, さらに日本語で文献検索ができる機能を兼ね備えた先端の研究情報を提供している。我々の目的は一般だけの活用ではなく学校教育者や研究者においても活用の輪を広げ相互理解を深めることにある (<http://www.biportal.jp/>)。

■ もう少し詳しく知りたい方のために：参考資料

本学会では, 今回の他に過去 2 回, 遺伝教育に関する公開講演会が行われ, 次の 2 誌に概要が紹介されています。

- ・遺伝 (エヌ・ティー・エス), 60 巻 1 号 (2006): 特集「遺伝学会レポート: 日本遺伝学会第 77 回大会と公開記念講座: 「遺伝をプラスイメージに」(五條堀 孝, 池内達郎, 藤川和男, 青野由利, 米田好文, 武部 啓)。
- ・遺伝 (裳華房), 57 巻 1 号 (2003): 特集「ゲノム時代の遺伝教育」(池内達郎, 布山喜章, 企画)

▼阿知波哲夫: 高校「生物」の現場からの遺伝教育についての提言

- ・向井康比己: 高校学校における遺伝教育はいかにあるべきか—第 2 回「遺伝教育に関する懇談会から」, GSJ コミュニケーションズ, 80(6): 17-20, 2005.
- ・阿知波哲夫: 日本遺伝学会の遺伝学の教育と普及に関する特別委員会に参加して, GSJ コミュニケーションズ, 80(6): 20-22, 2005.
- ・阿知波哲夫: 高校「生物」の教育現場からの遺伝教育についての提言, VIEW 21, 7 月特集号 2006 年度個別試験分析 Benesse.

▼颯田 葉子: 「遺伝／進化」の教育の意義に関する私見

- ・第 1 回遺伝学談話会レポート, 高畑直之: 基礎集団遺伝学, GSJ コミュニケーションズ, 80(3): 20-21 (2005)
- ・第 2 回遺伝学談話会レポート, 田嶋文生: 集団遺伝学教育の問題点, GSJ コミュニケーションズ, 80(3): 201-22 (2005)

▼池内 達郎: 高校「生物」における「ヒトの遺伝」のあり方

- ・池内達郎: 一般教養としての「ヒトの遺伝」を考える—高校生物の先生達による研修会に参加して, GSJ コミュニケーションズ, 81(3): 20-21, 2006.
- ・遺伝 (裳華房), 57 巻 3 号 (2003): 特集「染色体がわかる—教科書の先に広がる世界」(池内達郎, 中込弥男, 企画)
- ・GENETOPIA (信州大学医学部遺伝子診療部遺伝ネットワーク): <http://genetopia.md.shinshu-u.ac.jp/genetopia/index.htm>
- ・日本ダウン症ネットワーク: <http://jdsn.gr.jp/>

▼小林 悟志: 遺伝学教育に活用しよう「新世代バイオポータル」

- 我々のバイオポータルの概要と意義は, 先頃に出版された JST の「情報管理 9 月号」にて掲載されております。
- ・小林悟志, 藤山秋佐夫: 日本語バイオポータル西都 Jabion (ジャビオン) の概要とその利用法について, 情報管理 49(6): 324-333. <http://johokanri.jp/>

アンケート調査のまとめ

■参加者は約 80 名, 学会の会員と会員以外の参加者の割合はほぼ半々と推定。

- ・非会員の大多数は高校教諭 (とくに「生物」担当), 16 名からのアンケートが回収できた (1 名を除いて全て非会員): 女性 5 名, 男性 11 名; 40 代 10 名, 50 代 3 名, 30 代 2 名, 20 代 1 名。
- ・非会員が本ワークショップを知った情報源: 友人・知人から 4 名, 都生研の HP/実践生物教育の ML が各 3 名, 本学会の HP/雑誌「遺伝」8 月号/生物教育研究会 HP/くらしとバイオプラザ 21 の HP/他メディア, が各 1 名。

■それぞれの講演についてのコメント、感想

1. 高校「生物」の教育現場からの遺伝教育についての提言（阿知波哲夫）

- ・教科書で突然変異が扱われている所が問題では？ 形質発現が解説される部分で突然変異が触れられていない。知識は、発見された時間軸に沿って説明することも大切。染色体の後にメンデル遺伝を説明することに抵抗を感じる。（会員，40代，男）
- ・都生研，日本生物教育会，あるいは分子生物学会など，いくつかの学会や研究会でも提言がそれぞれ出されています。内容はすべて同じではありませんが，繋がりをもって，効率の良い，現実化されるような提言をして頂きたいと思います。（非会員，教材・教育関係会社員，30代，女）
- ・ヒトゲノム計画も教えるようになるとありましたが，どんなことを教えるのか知りたいです。（非会員，大学教員・遺伝カウンセラー，40代，女）
- ・遺伝＋環境＝形質という枠組みを確立し，その関係性の中で，ゲノムから生態系までを扱う，生物学の中心とする（ABO血液型と性格を云々する現状で，優性・劣性という枠組みは自害あって一利なし）。（非会員，高校生物教員，40代，男）
- ・発展的内容以前に，普通に今の教書を教えても3単位では足りません。提言を生かすためには教科書全体を見て，どこを削るのかを考える必要があるが，それはどこに訴えたらよいのか？（非会員，教員，40代，男）
- ・新しさを感じない。染色体から説明するオリジナルな授業について，少し具体的に詳しく説明していただきたい。（非会員，大学教員・筑波大，40代，男）

2. 「遺伝／進化」の教育の意義に関する私見（颯田葉子）

- ・一般市民を対象としたアンケート結果が非常に興味深かった。遺伝教育のポイントが少しずれていると感じた。（会員，40代，男）
- ・必要な遺伝／進化の基礎知識をどのように教えたらいいか？ 興味付けすればよいのか？ アンケートの結果も含めてヒントを得ました。ただ，“生活の中の遺伝”と“歴史・環境に支えられている”が，うまくつながらない気が……。 （教材・教育関係会社員，30代，男）
- ・いまひとつ，具体性が見えなかった。（高校教諭，40代，男）
- ・なぜ遺伝学教育が必要なのかの根本的な意味を教えてください，とてもためになりました。（臨床検査技師，40代，女）
- ・「病気」という言葉の使い方は難しいのだということも教えて欲しいと思います。なにか症状があるとき，それが体質なのか，病気なのか簡単に言い切れることではありません。色覚特性がよい例です。（大学教員／遺伝カウンセラー，40代，女）
- ・生命の中の遺伝と生命の繋がりを大切に等々の考え方に感銘しました。「体質と遺伝」や「病気と遺伝」の例（乳糖不耐）について，もう少し別の例も知る方法がありますか。（高校教諭，40代，女）
- ・進化の痕跡を追うのは賛成。変異と選択をセットにした「進化」の物語に遺伝を位置づけるのは反対。（高校生物教員，40代，男）
- ・「生命のつながり」を社会人になってから学ぶ機会が余りにも少ないと思います。（私立高校教諭，50代，男）
- ・生活の中で遺伝を考えるのは重要だと思った。生徒の興味を引きつけやすいので良いテーマだと思う。（会社員，50代，男）
- ・生物が選択科目であり，遺伝も進化も全く知らないで社会人になる者が多いことが，先ず問題。（教員，40代，男）
- ・具体的な進化の話がほしかったです。（高校勤務，40代，男）

3. 高校「生物」における“ヒトの遺伝”のあり方（池内達郎）

- ・「ヒトの遺伝」の教育の重要性が非常に良く理解できた。（会員，40代，男）
- ・劣性遺伝病の発症率を Hardy-Weinberg の式で表したのは“目からウロコ”的な話題として良いものをいただきました。病気も含めて遺伝を教えることについては文科省でも negative に考えているところもあります。文科省関係者にも教育を。（非会員，会社員・教材教育関係，30代，女）
- ・「ヒトの遺伝」の重要性を感じた。（高校教諭，40代，男）
- ・ヒトの遺伝的な多様性の理解と共存の心，肝に銘じ伝えて生きたいと思いました。（臨床検査技師，40代，女）
- ・先天異常を中心にお話されていましたが，一見元気にみえる私たちも皆，保因者どころか何らかの遺伝的要因のからむ疾患にかかっていると思います（がんに罹りやすい体質，その他の生活習慣病など）。なので，障害のある人を差別しないように，ということと共に私たち自身の問題なのだ（他人事ではないのだ）ということも語っていただきたいです。（大学教員・遺伝カウンセラー，40代，女）
- ・突然変異の普遍性について伝えていくことが大切であると感じました。（高校教諭，40代，女）
- ・遺伝子と環境の相互作用の中で位置づける（フェニルケトン尿症，高血圧，糖尿病）/遺伝病と生活習慣病，形質（多型）をつなげる（ABO，色覚，肥満）/ヒトと他の生物の相同性の中で扱う（遺伝子の転写，発生）。（高校生物教員，40代，男）
- ・遺伝的多様性の理解は重要と思いました。染色体異常に興味：新生児に0.6～1.0%，自然流産に50%，受精卵で40～50%。（私立高校教諭，50代，男）
- ・遺伝と障害はセンシティブな問題であると思う。避けていてはダメという先生の主張には賛成である。（会社員，50代，男）

- ・ぜひ、もっと多くの生物教員に池内先生の話聞いて欲しい。(教員、40代、男)
- ・ヒトの遺伝教育、賛同いたします。(高校勤務、40代、男)
- ・種々な連携が必要となる。本校内では保健体育、現代社会、家庭科を含む「生命」や「人間」などという名称の総合科目として再編成する動きが始まっており、加速すべきだ。(大学教員・筑波大、40代、男)

4. 遺伝学教育に活用しよう「新世代バイオポータル」(小林悟志)

- ・とても有用なwebsiteの説明に感謝。大学の講義にも十分に利用できる。活用したい。(会員、40代、男)
- ・実際に見てみないと何とも言えない部分はありますが、教員に紹介したいと思います。(教材・教育関係会社員、30代、女)
- ・とても役立ちそう。(非会員、高校教諭、40代、男)
- ・今後は是非 活用したい。(地方公務員、30代、男)
- ・素晴らしいサイトご紹介いただきありがとうございます。(非会員、臨床検査技師、40代、女)
- ・bioscience からの情報と医学的視点からの情報の融合が欲しいです。サイエンスとしては面白い知見でも、医学的には重みの低いこともあるので。(大学教員、40代、女)
- ・顔の見えるサイト：日本のどの大学でどんな先生が研究しているか、とくに中高校生時代の思い出などが分るといい。ただの辞書では魅力に欠ける。／インタラクティブに、特に「ケータイ」からのアクセス利用。(高校生物教員、40代、男)
- ・科学コミュニケーションはいびつな現状にある。本からの知識吸収が少ないのにビックリしました。(私立高校教諭、50代、男)
- ・ダイレクトメール(?)でバイオポータルのことは知っていたが、今まであまり利用していなかった。今日の話で、かなり使えそうだと感じた。(教員、40代、男)
- ・これまで、存在を知りませんでした。(高校勤務、40代、男)
- ・努力を認めたい。でも、誰が責任者になるのか、誰が校閲するのか、誰の成果になるのか、著作権の問題なども心配。(大学教員／筑波大、40代、男)

■ 全体についての感想

- ・生物教育を担う教師についての貴重な意見。生物〇〇をもった教員の養成。(会員、40代、男)
- ・全体的にやはり米国をはじめ外国の方が進んでいると感じます。ヒトの遺伝の取り扱い(生殖、病気)、webなど。お国柄も関係あると思いますが……性や遺伝病について、教育の場で論ずることをタブー視してきた部分があるので…。(非会員、会社員、40代、男)
- ・参考までに：農学・植物系の学会では、GM 食品の関係もあり、食物を教える家庭科とのコラボ、社会科(生命倫理を「倫理」で扱っている)とのコラボも考えられています。(教材・教育関係会社員、30代、女)
- ・遺伝についての生命倫理を「生物」で教える時の問題点：
 - a. 教員がかなり勉強しないとイケない。かなりの負担：しっかりとときちゃんと、バックグラウンドなど。自分の考えをおしつけないで、答えのない授業が本当に出来るか？
 - b. 答えのない授業の評価は？レポートの内容から、その子どもの姿勢がうかがえるか？型どおりなのか？、で評価はできるが…。評価が良くない生徒は“自分の考えが間違っている？”と思ってしまうかも…。
 - c. 進学校の生徒は良いが、そうでない学校では、“うちの子たちには無理だわ…”という教員もかなりいる。
 - d. 「生物」で生命倫理を教える必要はないという教員も(実はけっこう)いるらしいです。(教材・教育関係会社員、30代、女)
- ・もう少し時間をとって聞きたかった。(高校教諭、40代、男)
- ・最後の東大のコメンテーターの方の話は大変分りやすく良かった。(地方公務員、30代、男)
- ・先生方の生物学、遺伝教育への思いにより、豊かな人間性を持った子供達が育つのだと感じました。(臨床検査技師、40代、女)
- ・遺伝性疾患というと、「高校で習ったのは色盲」という人がとても多いけれど、色覚特性は病気と扱うかどうかは微妙なものなのです。もう少し適切な取り扱いをご検討いただきたいです。たいへん勉強になりました。ありがとうございました。(遺伝カウンセラー／大学教員、40代、女)
- ・カウンセラーなど、幅広い意見が聞けてよかったです。(高校教諭、40代、男)
- ・熱意が伝わってきましたが、学会での広がりはどうなのでしょう。お馴染みの方々という感じがちょっとしました。(高校「生物」教員、40代、男)
- ・大変勉強になりました。(私立高校教諭、50代、男)
- ・日本進化学会では、「進化学・夏の学校」という企画で高校教員向けの講義を丸1日の枠で実施している(無料)。遺伝学会でも同様の企画をやってもらえると嬉しい。(教員、40代、男)
- ・良い機会をつくっていただき有難うございました。(高校勤務、40代、男)
- ・ヒューマンマターを入れること／分子生物学を「生物Ⅰ」から取り入れること、に賛成。(高校生物教諭、50代、男)
- ・受付場所、体制が分りにくく、また不親切。東京から約2時間かけ、校務から脱けて駆けつける立場のことを考えてほしい。(私立・中高一貫校教諭、20代、女)
- ・松田先生と太田先生の話をもっと詳しく聞きたかった。より具体的な話が必要だと感じた。勉強になりました。感謝申し上げます。(大学教員・筑波大、40代、男)

2006年度自然史学会連合総会議事録（抜すい）

日 時： 2006年12月9日（土）13：30－15:30

会 場： 国立科学博物館自然史研修館4階講堂

出席学会（出席者）：日本遺伝学会（館野義男）、日本花粉学会（池田重人）、日本貝類学会（佐々木猛智）、日本魚類学会（茂木正人）、日本菌学会（出川洋介）、日本古生物学会（甲能直樹）、日本昆虫学会（清水 晃）、日本昆虫分類学会（友国雅章）、日本植物学会（山田敏浩）、日本植物分類学会（西田治文）、日本人類学会（海部陽介）、日本生物地理学会（向井貴彦）、日本藻類学会（野崎久義）、日本第四紀学会（斎藤文紀）、日本地質学会（斎木健一）、日本地理学会（手塚章）、日本蜘蛛学会（小野展嗣）、日本動物行動学会（上田恵介）、日本動物分類学会（高桑正敏）、日本霊長類学会（山越 言）、日本哺乳類学会（高槻成紀）、日本地衣学会（原田 浩）。

委 任 状： 種生物学会、植生学会、地衣類研究会、東京地学協会、日本プランクトン学会、日本ベントス学会、日本衛生動物学会、日本生態学会、日本動物学会、日本鱗翅学会、日本蘚苔類学会。

運営委員会： 篠原現人、野村周平

代表挨拶： 西田代表より挨拶があった。

議長選出： 出席学会の中から、議長の推薦を募ったが、なかったので、運営委員会より、高桑正敏氏（日本動物分類学会）を推薦、承認された。

・総会成立の確認 出席22、委任状11、計33学協会で定足数（37団体の3分の2）に達したので成立。

1. 報告事項（括弧内は報告者）

- 講演会の開催（野村）：11月12日（日曜日）11：00～16：30に、神奈川県立生命の星・地球博物館において講演会を実施した。なるべく広い分野をカバーできるように、昨年同様、10名の演者に各20分ずつ話をしてもらった（配布資料参照）。参加者数は約110名。一昨年来まで科博で行っていたシンポジウムの形式を脱して、昨年から地域の博物館などで行う講演会の形に改めたが、一般の参加者も多く、連合の認知という意味では非常に効果が上がっているという手ごたえを感じている。若干の問題点として、1) 遠くから時間をかけてきて話をしてもらうには話す時間が物足りないという演者側の意見があった、2) ポスター展示に参加する加盟学協会が少ないので、もっと積極的に参加してほしい、統一フォーマットを検討中、3) 次回は早めに会場側の広報とコンタクトを取って広報活動を行うべき、などの点が挙げられた。
- シンポジウムの共催など（野村）：学術会議の中に設けられた「学術・芸術資料保全体制検討委員会」委員である馬渡駿輔氏からの依頼で、学術会議の公開講演会「博物館が危ない！美術館が危ない！―指定管理者制度・公共サービス改革法の落とし穴―」の後援者として名を連ねた。
- 博物館部会（斎木・西田）：今年度前半は十分な活動ができなかったが、年度末までに部会の会合を開催して体制を整え、活動方針を検討したい。博物館活動に深くかかわっている加盟学協会会員からの意見を吸い上げ、学術会議などにおける議論に反映できる活動を目指す。また今回、兵庫県立人と自然の博物館基本構想に対するパブリックコメントの募集があったので、西田が連合代表名でのコメントを送った（配布資料参照）。
＜質問＞連合の中に学術会議の連係会員は誰がいるのか？リストができるとよいのではないかな？
＜回答＞連係会員のリストはあるので、リスト作成の方向で検討する。
- ホームページ（篠原）：ホームページの維持運営については、月2万円の経費を使って業者に委託しており、この経費が高すぎるとの批判もあるが、一般と比較すると格安であることは明らかであり、よりよく利用することを心がけるべきであると考えている。広く一般向けの記事よりもまず加盟学協会に必要な記事の充実を図りたい。
＜質問＞加盟学協会からのリンクは？
＜回答＞連合HPからすべての各加盟学協会HPへリンクしている。各加盟学協会HPからは、リンク集がある場合にはほとんどがリンクしていると承知している。
- 大学における学会会場費値上げ問題（西田）：以前に行ったアンケート調査の結果→配布資料。データが必ずしも十分でなかったこと、意見書を出すタイミングを逸してしまったことから、次回をにらんで情報収集中。
- その他（野村）：自然史学会連合は日本学術会議第20期の協力学術研究団体として登録された。学会連合体としては現在唯一の登録団体である。

2. 審議事項

- 2005年度会計決算の報告（山田）：支出項目名「シンポジウム開催費」を「講演会開催費」に訂正した。
- 監査報告、承認（野崎、池田）：野崎、池田両監査役員出席により、決算が適切に処理されていることが報告され、承認された。
- 2006年度会計経過報告（山田）：2005年度決算と同じく支出項目名を訂正。
- 2007年度予算案の承認（野村、篠原、山田）：予算案を審議するに当たって、来年度の活動方針案が示された。従来のシンポジウムの後継である講演会の開催を活動の一つの柱として力を注ぎたい。さらにこのところ活動が停滞気味であった博物館

部会の新体制作りを急ぎ、具体的な活動方針を確立していきたい。ホームページについては前述のような方針で、整備を進めていきたい。これまで予算項目の中にあった「自然史教育展開プログラム」と「自然史研究機関立案アクションプラン」はここ数年、支出ゼロが続き、実態がなくなっているため、項目を削除し、予算は予備費に回して、より融通の利く態勢としたい。

＜質問＞ホームページについて、加盟学協会員のためのホームページ作りというのは意味があるのか？事務局からのメールの配信で十分ではないのか？

＜回答＞加盟学協会員だけのためのものではなく、エッセイ、ギャラリーなどの一般向けコンテンツも維持していく。具体的にどのような改革を行うのか、運営委員会に持ち帰って検討する。

この後予算案が示され、2005年度決算と同じく、項目名を訂正した後、承認された。

5. 2006～2007年度運営委員、役員（西田）：昨年の総会で承認された運営委員（森田・上田・野村・篠原・海部・出川・山田）のうち、森田氏はどうしても運営委員としての時間が取れなくなってしまったため、齋木氏と交代した。しかし、齋木氏が地質学会の連合担当として認定されるために時間がかかり、つい先ごろの交代となった。代表指名の運営委員として、藤井氏を任命した。以上、報告の上、承認された。

6. 連合運営規則の改定（野村）：学術会議の体制変更のため、連合運営規則第3条の文言に訂正が必要になった（配布資料参照）。また、新規加盟を希望する団体が、総会での承認までの間長期間待たされるのを避けるため、「連合の総会で審議する」という文言を変更したい。

→出席者からの指摘により、第3条を以下のように変更することがあらためて提案され、出席学協会全員の挙手をもって承認された。

3. 連合への加盟と連合からの脱退は各学協会の自由意思による。ただし、学術会議協力学術研究団体以外の加盟希望についてはその適否を運営委員会で審議し、その結果について加盟学協会の2/3以上の賛成をもって承認する。

7. 新規加盟学会の承認：6月に新規加盟の希望のあった日本地衣学会の加盟が承認された。当学会は申請の時点にさかのぼって加盟と認める。ただし、分担金は翌年度から。

8. 来年度講演会の予定（野村）：滋賀県立琵琶湖博物館で開催することについて内諾をもらっている。時期は今年度と同じ頃（科研費の申請は11月25日）としている。再来年度以降については、もし加盟学協会員から開催場所の提案があれば検討したいので、積極的に申し出ていただきたい。

9. その他：日本生物地理学会 向井貴彦氏から出席者へのお願ひ、岐阜県では周囲に自然史系の博物館がほとんどなく、多数の愛好家にとって情報交換や教育普及の場がなく、大変不自由している。地域の声を集め、博物館設立の要望を出すに当たって、効果的な方法や手続きなどについてご存知の方がおられたら、是非ご教示いただきたい、とのこと。（レポーター 館野義男）

本 会 記 事 から

◆Rudi Balling 第20回ベルリン大会委員長との会見◆

——国際遺伝学会招致に向けて——

日 時 2006年11月2日午後8時から11時まで

場 所 Restaurant Augustus, Marriott Hotel, Braunschweig, Germany

出席者 Rudi Balling 教授、五條堀孝教授、館野義男（記）

会見内容の要点（順不同）

1. アメリカと南アフリカが立候補する可能性がある。
2. 組織委員会は国際、国内と作るより1つにしたほうがいい。
3. 大会の日程は早く決めて、他の関連学会にはこの日程付近で会議を開催しないよう、協力を要請する。
4. サテライト会議を同時に東京などで開催して、協力機関や学会を増やす。
5. IGF 評議委員に日本での開催を早くからアピールする。そのためには、日程・規模やスコープなどについて具体案を示す必要がある。
6. アメリカの Chuck Langley の協力が大きい。
7. 開催地のユニーク性（南半球で初めて、UN 統合以後最初など）をアピールする。
8. 開催地の歴史や文化を強調することも必要。
9. しっかりした大会開催エージェントを選ぶ。
10. 準備金や大会費用などの収入・支出は個人名では行わず、学会で行う。
11. 口出しはするが協力しない学会といかに交渉するか。
12. 寄付金集めには、会社や組織の名前を冠することや、この大会といかに関係があり、メリットがあるかを説得する必要がある。
13. アジア地域の協力は必須である。特に、中国とは事前に協議をする必要がある。

Braunschweig は、数学者のガウスやデデキントの生誕の地であり、12世紀に活躍したヘンリー・ライオン王の本拠地だと、Balling教授から聞かされて、見直した次第です。

2006年10月2日～4日に日本学術会議総会が開催され、会員の互選により金沢一郎氏会員が選出されました。また2006年8月までに1990名の連携会員が決定しましたが、このうち日本遺伝学会会員が23名含まれていました。

斎藤成也（学術会議第20期会員）



日本学術会議が大きく改革され、2005年10月に第20期がはじまって1年が経過しました。今年の8月末に、1990名の連携会員が決定し、ようやく本格的な活動ができるようになりました。このうち、日本遺伝学会会員が23名含まれていました。末尾のリストをご覧ください。210名の学術会議会員中にも、日本遺伝学会会員が5名含まれており、日本学術会議における日本遺伝学会の存在感の大きさがおわかりになるかと思います。なお「連携会員」は日本学術会議の各会員が、学術会議の活動にふさわしいと考えた研究者をそれぞれ数名推薦したもので、会員とともに日本学術会議の活動を担います。

日本学術会議は以下のような多段階の会合があります。ひとつは総会で、会員が参加し、年に2～3回開催されます。210名の会員は70名ずつ3部に分かれており、第1部（人文社会科学関係）、第2部（生物学関係）、第3部（数物系関係）です。それぞれの部会は、通常総会の開催時に開催されます。さらに、30の分野別委員会があります。遺伝学に関係の深いのは、基礎生物学委員会、応用生物学委員会、基礎医学委員会ですが、このほかに第2部に関連する委員会が7個あります。総会と部会は会員のみが参加しますが、委員会には連携会員も参加します。当初連携会員が全員委員会に所属することになっていましたが、そうすると各委員会に100名前後の会員と連携会員が参加することになり、非現実的です。結局、委員会の下に設置された分科会の委員長など役員になった連携会員のみが委員会に出席するという変更され、斎藤（2006a）で指摘したとおりになりました。

2006年10月2日～4日に総会が開催され、会員の互選により新会長（ただし、70歳の定年にともない退任した黒川会長の残り任期2年）に、第2部会員で部会長でもある金沢一郎氏が選出されました。3名の副会長には、浅島誠会員（第2部；留任）、鈴木興太郎会員（第1部）、土居範久会員（第3部）が会長から指名され、承認されました。

10月2日の総会では、はじめて長時間の自由討論があり、総会らしい雰囲気となりました。これまでに開催された3回の総会では、特別講演に長い時間がとられたり、会則変更の事務的な報告があったり、あるいは黒川会長の長話があったりして、ほとんど議論にとれる時間がなかったのも、よい変化だと思います。ひんぱんに議論となったのが、総合科学技術会議との関係です。日本学術会議とは「車の両輪」の関係にあるという比喩もあるが、かなり方向性の違うものであるという議論が多かった。私も、両者の関係をドリトル先生の話に出てくるオシオサレツのようなものではないかと指摘したことがあります（斎藤 2006b）。初日午前中は会長選挙もあったせいか、160余名の出席がありましたが、午後以降はほぼ半分の会員（110名弱）の参加にとどまりました。私の属する第2部（生物学関連）は出席率がよく、第2日の部会には70名の会員のうち47名が出席していました。

私は、日本学術会議の主たる活動は分科会で行われるだろうと予測しています（斎藤、2006b）。分科会は20名前後の会員と連携会員が参加して開催され、規模としては以前の日本学術会議に設けられていた「研究連絡委員会」と似ています。しかし、学協会の代表が集まっていた以前の研究連絡委員会とは異なり、会員も連携会員も、特定の学協会を代表するものではありません。ではなにをめざすのかということは、各分科会にゆだねられています。基礎生物学委員会と応用生物学委員会にはそれぞれ14個と6個の分科会が設けられましたが、日本遺伝学会会員に特に関係が深いと思われるのは、遺伝学分科会、分子生物学分科会、遺伝資源分科会、ゲノム科学分科会です。これらの分科会の活動が今後活発になることが期待されます。

<学術会議第20期会員のなかの日本遺伝学会会員>（5名）

岡田清孝、郷 通子、小原雄治、斎藤成也、本庶 佑

<学術会議第20期連携会員のなかの日本遺伝学会会員>（23名）

石川冬木、小川智子、小幡裕一、河野重行、倉田のり、五條堀孝、近藤孝男、酒泉 満、颯田葉子、篠崎一雄、城石俊彦、高橋三保子、高畑尚之、辻本 壽、中島裕美子、西田 睦、丹羽太貫、長谷川眞理子、藤山秋佐夫、堀田凱樹、森 郁恵、矢原徹一、吉村 淳

<引用文献>

斎藤成也（2006a）地球世紀の幕開けに臨んで日本学術会議に望むこと。学術の動向、2月号、34-37頁。

斎藤成也（2006b）リレー連載：分科会に希望を託して、科学、76巻8号、834頁。

（注）この報告は、日本遺伝学会ホームページに掲載されています。

◇年頭にあって◇

日本学術会議会長 金澤 一郎



明けましておめでとうございます。平成19年という新しい年が、日本学術会議にとって有意義な年であることを心から願って、一言ご挨拶申し上げます。

日本学術会議が生まれ変わってから、早くも1年3か月が過ぎました。これをヒト（生物学的な人類の意味です）の成長になぞらえますと、二足歩行が堂に入ってきた頃に当たります。これは、脳が最も柔軟い時代であって、何でも吸収し、何でも身に付けることができ、輝かしい未来を感じさせる頃です。

そういう目で日本学術会議を眺めて見ますと、安倍総理を始め、関係閣僚のお力添えは強力であります。そればかりか、各府省からいくつかの諮問や審議依頼を頂くなど、学術会議の潜在力を認める方向が徐々に現れています。

会員・連携会員の科学者や関係学協会の協力によって作成した、イノベーション25戦略会議への日本学術会議からの中間的提案が、昨年末の同戦略会議においても大変高く評価されています。本年も昨年以上に、学術会議の真価を発揮できるよう取り組んでまいります。

一方、科学者コミュニティに目を向けますと、去年は研究における不正行為や研究費の不正使用などによって、科学に対し、社会から疑いの眼差しが向けられていました。このことは、「多くのまっとうな科学者たち」にとって誠に迷惑千万なことです。そして、能力ある科学者たちがそのために元気を無くし、日本の科学のみならず社会全体の活力が著しく低下することを憂えます。日本学術会議は、この問題に対して昨年10月に「科学者の行動規範」を策定し、積極的に取り組んでまいりました。本年が、そうした「憂え」を一気に払拭するような、科学者コミュニティにとって輝ける年になることを心から祈り期待しています。

昨年秋には、会員・連携会員全員がそろい、実質的な活動が始まり、本年はさらに飛躍する年です。そうした意味を込めて、会員・連携会員の皆様を始め、協力学術研究団体の関係者の方々に、これからの更なるご協力をお願いいたしましてご挨拶に代えます。

日本学術会議主催公開講演会

「知識社会における教師の科学的教養と教員養成」

- 日 時 平成19年3月12日（月）10：00～17：00
- 会 場 日本学術会議講堂（定員250名・参加費無料）
- 主 催 日本学術会議
- 協 力 （独）メディア教育開発センター

SCS（衛星通信を利用した大学間ネットワーク）を利用し配信します

プログラム

挨拶 金澤 一郎（日本学術会議会長，国立精神・神経センター総長）
秋田喜代美（東京大学大学院教育学研究科教授，日本学術会議第一部会員，課題別委員会「教師の科学的教養と教員養成に関する検討委員会」委員長）
総合司会 内田 伸子（お茶の水女子大学副学長，日本学術会議第一部会員）

午前の部（10：00－12：45）

基調講演「これからの教師教育について：国際的視点からの歴史と展望」

佐藤 学（東京大学大学院教育学研究科教授，日本学術会議第一部副部長，同委員会副委員長）

課題別委員会報告「教師の科学的教養と教員養成政策：委員会からの要望」

秋田喜代美

シンポジウム1「知識社会における教師の科学的教養と教師教育への提言」

司会 三田 一郎（神奈川大学工学部教授，日本学術会議第三部会員）

シンポジスト 内田 伸子

唐木 英明（東京大学名誉教授，日本学術会議第二部部長）

佐藤 勝彦（東京大学大学院理学系研究科教授，日本学術会議第三部会員）

氷見山幸夫（北海道教育大学旭川校教授，日本学術会議連携会員）

午後の部（14：00－17：00）

シンポジウム2「教師の科学的教養育成のためのこれからの教師教育政策」

司会 村山 祐司（筑波大学大学院生命環境科学研究科教授，日本学術会議連携会員）

話題提供者 銭谷 眞美（文部科学省初等中等教育局長）（予定）

天野 郁夫（東京大学名誉教授，日本学術会議連携会員）

指定討論者 浅島 誠（東京大学大学院総合文化研究科教授，日本学術会議副会長）

藤田 英典（国際基督教大学教養学部教育学科教授，日本学術会議第一部会員）

本田 孔士（大阪赤十字病院病院長，日本学術会議第二部会員）

総括・閉会挨拶 内田 伸子

* * *

申込方法 E-mail, FAX またははがきにて必要事項をご記入の上，公開講演会担当宛にお申し込みください。

■必要事項／氏名（ふりがな）・年齢・職業・連絡先（E-mail アドレス，FAX 番号，電話番号）

* 定員（250名）となり次第，締め切りとさせていただきます。

なお，定員に達しない場合は，当日も受付を行いますので，直接事務局へお問い合わせください。開催日まで定員に達した場合，受付に漏れた方にのみ，ご連絡を申し上げます。

<お問い合わせ先>

日本学術会議事務局企画課公開講演会担当

〒106-8555 東京都港区六本木7-22-34

TEL：03-3403-1906 FAX：03-3403-6224

E-mail: info@scj.go.jp

URL: http://www.scj.go.jp

第44回 アイソトープ・放射線 研究発表会 発表論文募集

発表論文は、2007年2月28日（水）締切です。講演要旨原稿締切は2007年4月16日（月）です。

この研究発表会は、異なった専門分野の研究者が一堂に会し、アイソトープと放射線の理工学、ライフサイエンス、薬学、医学への利用技術を中心とした研究およびその基礎となる研究の発表と討論を行い、各分野間の知見と技術の交流を図るものです。奮ってご応募、ご参加下さいませようご案内いたします。

なお、名称が第41回までの「理工学における同位元素・放射線研究発表会」から変更されました。

会 期 2007年7月4日(水)～7月6日(金)

会 場 日本青年館（東京都新宿区霞ヶ丘町7番1号） <http://www.nippon-seinenkan.or.jp/>

(1) 内 容 それぞれの研究分野において、その専門的な成果を得た放射性同位体、安定同位体や放射線の利用研究、およびこれら利用の基礎となる研究、少なくとも一部に未発表の部分が含まれていること。

(2) 発表者の資格 発表者の一人が本発表会の主・共催学・協会の会員であること。

(3) 発表申込区分

- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1. 基礎データ | 12. 環境放射能 |
| 2. 放射線測定機器・測定法 | 13. ライフサイエンスへの利用 |
| 3. 分析（放射化分析、放射化学分析等） | 14. 薬学への利用 |
| 4. トレーサ利用 | 15. 医学への利用 |
| 5. 製造・分離・標識化 | 16. 安定同位体 |
| 6. 線源・加速器 | 17. 放射線管理（汚染除去、健康管理、安全取扱、廃棄物処理、運搬、遮へい、コンピュータによる管理等） |
| 7. 放射線利用機器（ラジオグラフィ、エネルギー利用、発光塗料等も含む） | 18. 放射線効果 |
| 8. 陽電子消滅 | 19. コンピュータ利用（シミュレーション、データ処理、解析技術等） |
| 9. メスバウア効果 | 20. その他 |
| 10. 放射線効果 | |
| 11. 地球科学・宇宙科学 | |

(4) 発表形式 口頭発表またはポスター発表。

(5) 口頭発表時間 1件15分（発表12分、討論3分。）

主として Power Point（Microsoft 社製）利用による発表とします。ただし、OHP シートによる発表も可能です。

(6) ポスター発表 1件の発表に展示パネル（横90cm×縦210cm）2枚を用意します。

(7) 申込方法 日本アイソトープ協会ホームページ（<http://www.jrias.or.jp/>）上から申込み下さい。ホームページを利用できない方は事務局までお問い合わせ下さい。

(8) 申込締切 2007年2月28日（水）

(9) 講演要旨 口頭発表、ポスター発表とも、1件につきA4判用紙1枚。
要旨原稿の書き方と見本は、ダウンロードしてください。

(10) 講演要旨原稿締切 2007年4月16日（月）

(11) 参加費 2,000円（学生は無料） 要旨集 3,000円（消費税含む）

そ の 他

(1) 論文集は発行しませんが、日本アイソトープ協会が発行する学術論文誌 RADIOISOTOPES への投稿を歓迎します。

(2) 発表申込件数、内容等によっては口頭発表からポスター発表に、またはポスター発表から口頭発表への変更をお願いすることがあります。

(3) 英語での口頭発表が可能です。ご希望の方は申込の際に、内容説明欄にその旨を付記して下さい。

問合せ先 アイソトープ・放射線 研究発表会 運営委員会事務局

日本アイソトープ協会 学術部学術課 西島 仁

〒113-8941 東京都文京区本駒込2-28-45

TEL 03-5395-8081 FAX 03-5395-8053

E-mail gakujutsu@jrias.or.jp

URL <http://www.jrias.or.jp/>

◆幹事引き継ぎ会—新会長・幹事を迎えて◆

名 称 2006年度第3回日本遺伝学会幹事会（新幹事への引き継ぎ会）
 日 時 2006年12月25日（月） 15：30～17：45
 場 所 国立遺伝学研究所会議室
 出席者 石和、田嶋、遠藤、斎藤、高畑、品川、岩崎、小林、真木、山本、松浦、館野（五條堀代理）
 欠席者 城石、福井、池村、五條堀
 記 録 事務局鈴木

第8回遺伝学談話会（話題提供：品川日出夫会長）終了後、セミナー室から会議室に席を移して幹事会を開く。会議の内容は概略以下の通り、项目的に記す。

（石和 会長）

任期を終えるにあたり、各幹事から新幹事への引き継ぎを旨として現在までの状況を担当分野について報告説明し、問題点などについて質疑応答を行いたい。本日は時間的制約もあり不十分な点については、新旧幹事間で今後随時話し合っていくことにしたい。

新年に入り次第、会長は委員等の選考や委嘱を行っていただきたい。

- ・香川弘昭教授を第79回大会委員長に委嘱
- ・（内部）会計監査2名の選出。外部監査導入についての検討をはじめる。
- ・選考委員の選出及び調査委員の選出（規約を参照）
- ・その他会長の専務事務事項がかなりあるので、事務局のファイルを参照していただきたい。
- ・年間の行事予定などをなるべく早く策定しておく。
- ・初年度は、少なくとも評議員会を年2回開催することが必要である。春の評議員会では、新執行部の学会運営に関する方針を提示し承認を受ける。研究機関の新しい運営状況、政府の科学技術政策、学術会議の動向、学術と社会の迎える地球規模の課題などから従来になく学会としての役割の重大さを感じている。評議員会と幹事会のより積極的な連携した活動を期待したい。
- ・会長（ならびに幹事）、評議員各位は、全会員からの付託を受けてその任務にあたられることを、忘れないでいただきたい。会員からの年会費によって財政の大半が成り立っている。経費節減と共に効果的積極的な予算運用を心がけている。
- ・一昨年より、「総会資料」を GGS コミュニケーションズの特集号としてかなり詳細にわたりいろいろな資料・記録・報告などを掲載した。会長は学会内外から入るすべての情報を把握できる立場にあり、その内容の選択を慎重にしつつも会員に出来るだけ公表するようにつとめて来た。今後、個人情報の取り扱いについてはさらに慎重を期す必要がありそうだ。

（田嶋 庶務幹事）

- ・選挙についての問題点説明。評議員当選者の辞退に関する規則不備。海外会員の選挙権は現状ではないが、検討を要する。会長選挙に関する規則の不備など。詳細は今後に委ねられる。
- ・学会賞（木原賞、奨励賞）の英語名は現在では慣行に従っているが、統一した案を検討中。
- ・入会申し込みで紹介者がいない場合は、原則として庶務幹事が人物調査を行って来た。
- ・諸団体からの共催、協賛の申込みは、会員からの依頼の場合は無条件で承諾した。
- ・会則および内規等には、現状において問題点を含む箇所がある。また、政府からの監視が厳しくなることもあって、学会組織、諸規則、会計監査など整備が指摘されることも予測される。日本遺伝学会機構図の提示も求められている。今後これらの検討が急がれる。

（遠藤 編集幹事）

- ・GGS 投稿状況を資料に基づいて説明。詳細は省略。
- ・GGS の発行状況が以前より回復してきた。定期刊行物としての必要条件である。
- ・J-STAGE 投稿審査システムの説明会が1月31日に東京にて行なわれる。
 07年大会総会（岡山大）で経緯を報告、運用を開始予定。多くの学会が採用している。
- ・科学研究費補助金の審査が厳しくなってきた。平成19年度より学会誌の直接出版費に関して、原則、競争入札となる。
- ・外国の大手商業出版社からのアプローチが頻繁である。対応を今後検討したい。

(斎藤 会計幹事)

- ・新年度の予算についてはかなり工夫をこらしたが、今後の学会運営のあり方を反映した一層の改善が望まれる。
- ・メデイ・イシュからの契約破棄とその引き継ぎを日本出版貿易に依頼した。
- ・今後は、学会の(財団)法人化を検討する必要がある。
- ・学生会員の会費を検討してきた。(現在¥6,000)→(案¥3,000)、およびその条件など。
- ・国際的な活動を目指す学会として、諸規約の英文化が望まれる。
- ・規約誤り・不備の訂正・正確さを図って行くことに努力する。

(高畑 将来計画幹事)

- ・遺伝学談話会はだいたい2か月に1回開催(世代を超えたコミュニケーションを目的)してきた。遺伝学談話会からいろいろな動きが生まれることを期待している。なお第6回遺伝学談話会(大澤省三博士)の講演内容を敷衍して、博士が論文を新たに書き下ろされ、このたび雑誌「遺伝」に掲載されることとなった。
 - ・当初の出版事業企画については出版社との話し合いがうまくいかなかった。
- ただし、「遺伝学の現状と展望」などの教育的な配慮にとんだ出版物は、なお多くの会員から要望されているかに思われる。今後は遺伝学の教育・普及活動を担当する幹事とも協力して、検討していただくのが望ましいだろう。

(福井 渉外庶務幹事、代理館野)

- ・国際遺伝学会誘致にむけて、2008年7月ベルリン大会でアピールする必要がある。
- この秋に、五條堀、館野委員はベルリン大会の責任者と直接会っていろいろな情報を得ることが出来た。この簡単なメモは本会記事別項を参照されたい。
- ・関連学会への呼びかけおよび準備委員会の早期立ち上げが必要である。
 - ・昨年のつくば大会に提示された評議員会、総会報告の内容を再確認した。

(城石 企画集会幹事) 資料回覧により。

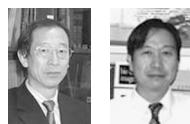
- ・従来より当幹事が生物科学学会連合に委員として出席。これまでの議事は随時報告して来た。
- ・BP賞の選考にかんするとりまとめなど担当。選考委員長をつとめる。
- ・遺伝学会開催候補地選定と評議員会、総会への提案。
- ・秋の大会の準備状況について本部との連絡役、および総会の準備・進行を担当。

(終わりに)

ひきつづき、三島市内の食堂に席を移し、去り行くものへのねぎらいと、新会長・幹事各位への期待を込めて想いが交差し、おのずと右腕が伸びて乾杯を唱和した。新旧幹事の話し合いが進んでいた。帰路12月25日の夜はことのほか冷えて、駅に向かう背に無情な雨が降り注いでいた。(文責：石和) ■



2005～2006年幹事会メンバー (2005. 1. 22の幹事会にて写す)



最終幹事会を終えて (会長日々終章)

◆2期4年の最終幹事会を終えて、多くの思いが私の胸を去来する。それはあたかも偉大な先達からタスキを受けてひたすら走り抜き、次のランナーに手渡して路上に崩れ落ちるあの箱根駅伝そのものでした。区間新はとても無理でしたが、困った顔一つ見せず非力な私に伴走して下さったチーム幹事会の幹事諸氏には感謝しなくてはならない。走りながら、かつてJ.F. クロー先生や根井正利先生に「若い人を大切にせよ」と励まされたことを思い出していた。◆年が新たまり幹事会の記録をまとめていると、いろいろお伝えしておきたい事柄が思い出されて来る。大半は、私自身が目指してはいたが、着手できなかったことである。◆かつて米本昌平氏が指摘されていたように、遺伝学者は生命倫理について正面から向かい合うべきであると思う。今こそその時である。学会の存在理由の一つでもあろう。「自分に厳しく、相手にはやさしく、とも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されて行くのである。そして、“たのもし

い君たち”になって行くのである。」(司馬遼太郎) たのもしい君たちとは、遺伝学会のことである。遺伝学会の意志が明確に伝わるよう望まれているのではないだろうか。常置委員会の設置を検討していただきたい。◆同じく、さらに継続的努力を期待するのは、遺伝学についての対話の推進である。「頭の良さは、およそ50%が遺伝するようだ」とテレビで、ある脳学者が解説する。50%遺伝するとはいったいどういうことなのだろうか。分かったようで分からない。では、どう話せば良いだろうか。個別に解明されている遺伝子研究の解説は多い。そして明快である。それでは済まされない、かつ科学的視点が要求される事柄が問われることが実際は多い。学会としての叡智をここでも結集したい。◆年頭の各紙に紹介された今後の科学の発展予測に、人類学(ヒトの系譜)、病気と遺伝子との関係が指摘されていた(サイエンス)。また情報革命が一層人間社会に浸透し、21世紀において脳機能に関する問題が起こるかもしれないと予測(懸念)されている。人間というとき何を意味するかが、今世紀中には問われるという。いよいよ7枚目のヴェールがはがされる。これを強調するのは、ブレビン・トフラー氏である。人間の再定義が迫られそうだとも言う。国際的なレベルで遺伝学者も議論に参加すべき課題である。◆一方、遺伝と環境の議論も国際的なレベルで進めることが急務となっている。ゲノムに込められた生物の生きかたには、「しなやかさ」もあれば「あやふやさ、不完全さ」もある。決して自己完結型ではない。環境と密着した歴史が刻まれている。だから、その実態をしっかりと(科学的に)把握し、人間と環境、生物多様性の再定義と現代文明への警告が今求められる。これは、独り一学協会に課せられた科学者の責務ではなく、関係者の連携と国際的なテーブルが必要なのは言うまでもない。◆こうした諸問題に遺伝学会で出来ればイニシアティブをとって行動したいと多くの幹事と話し合ったが、準備不足でかなわなかった。我が国の研究者がおかれている状況を考えると少々時間も必要であろう。しかし、評議員の有志がもう少し遺伝学会の意思決定に積極的に関与していただければまた事態は変わるかもしれない。評議員会は会員を代表して学会のあり方に意見を提示するようお願いしたい。幹事会からも今以上に重要案件の検討を評議員に委ねる努力が大切である。◆私たちは学会運営に可能な限り力を注いでもりである。しかし、まだまだ入り口に私はいる気がする。「付き合う異性によって人間はどんどんセンスが良くなる」(倉本聰) だから、まだ不十分さもよく分かるのかもしれない。ふと、プリニウスの死に喩えられたある作家の追悼記が頭をよぎる。「ベッドで読書中、突然頸動脈瘤が破裂。真珠のような大粒の涙が一つ、左目からこぼれて……一瞬の死でした」(澁澤夫人著、柳田邦男の紹介) ただただ肅然となる。◆最後に「新・がん50人の勇氣(柳田邦男)」からの引用で結びたい。「たとえ世界が明日終わりであっても、私はリングの樹を植える。」すばらしい言葉はいのちと響き合い、時代を超えていのちを繋いで行く。私(柳田)はよくそう思う。繋がるいのちとは、単に親子代々の血の繋がりでだけでなく、無縁の他者であっても、言葉によって躍動した生き方のエピソードが伝えられることによって、鎖のようにいのちの躍動が繋がっていくという豊かな膨らみのあるものなのだ。」◆会員諸氏の健闘を祈ります。(石和貞男)

◆会 員 異 動◆

新入会・再入会

田 中 健太郎	411-8540	静岡県三島市谷田1111 総合研究大学院大学遺伝学専攻
佐 藤 牧 子	171-8501	東京都豊島区西池袋3-34-1 立教大学理学部生命理学科
幅 大 輔	168-0082	東京都杉並区
原 田 枝里子	255-0004	神奈川県中郡
シバスタラン スハルナン	104-0032	東京都中央区八丁堀4-2-2 共同ビル(新京橋) 6F 株式会社国際バイオインフォマティクス研究所
中 村 太 郎	558-8585	大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学大学院理学研究科 生物地球系専攻 細胞機能研究室
太 田 邦 史	351-0198	埼玉県和光市広沢2-1 独立行政法人理化学研究所・中央研究所・ 太田遺伝システム制御研究室
笠 原 正 典	060-8638	札幌市北区北15条西7丁目 北海道大学大学院医学研究科

住 所 変 更

大 川 安 信	305-8602	茨城県つくば市観音台2-1-2 農業生物資源研究所
---------	----------	------------------------------

七 宮 英 晃	790-8577	愛媛県松山市文京町3番 愛媛大学無細胞生命科学工学研究センター 進化工学部門
梅 津 桂 子	814-0193	福岡市早良区田村2-15-1 福岡歯科大学 基礎医歯学部門 機能生物化学講座 生化学分野
武 智 正 樹	650-0047	兵庫県神戸市中央区港島南町2-2-3 理化学研究所 発生・再生科学総合研究センター 形態進化研究グループ
福 本 泰 典	260-8675	千葉市中央区亥鼻1-8-1 千葉大学薬学研究院 分子細胞生物学研究室
押 海 裕 之	060-8638	札幌市北区北15条西7丁目 北海道大学大学院医学研究科病態制御学専攻病態解析学講座 感染症制御学分野
山 口 由 美	108-8639	東京都港区白金台4-6-1東京大学医科学研究所内 ヒトゲノム解析センター 3階 独立行政法人理化学研究所 遺伝子多型研究センター 情報解析研究グループ 統計解析研究チーム
齋 藤 久 美	998-0026	山形県酒田市

退 会

水見英子, 島田多喜子, 武藤あきら, 秦野慎矢, 農 大輔, 北村朋子, 福岡秀雄, 佐野 浩, 佐々木義之, 金子真美, 小林克己, 荻原秀明

訃 報

GILES, N. H. 外国名誉会員 2006年10月16日に逝去されました。享年91歳
辻 野 史 会員 2006年10月27日に逝去されました。享年29歳
大 島 長 造 国内名誉会員 2006年12月29日に逝去されました。享年90歳

謹んで、哀悼の意を捧げます。

寄贈図書・交換図書

科学	Vol. 76, 77	No. 10, 11, 12, 1	(2006, 2007)
JOURNAL OF CHINA-JAPAN FRIENDSHIP HOSPITAL	Vol. 20	No. 3, 4	(2006)
JOURNAL OF SHANGHAI UNIVERSITY	Vol. 10	No. 1, 2, 3, 4, 5	(2006)
Chinese Journal of APPLIED & ENVIRONMENTAL BIOLOGY	Vol. 12	No. 4, 5	(2006)
国立科学博物館専報		No. 40, 41, 42	(2006)
CHINESE QINGHAI JOURNAL OF ANIMAL AND VETERINARY SCIENCES	Vol. 36	No. 4, 5	(2006)
Revista de SALUD ANIMAL	Vol. 27	No. 1, 2, 3	(2005)
Revista de SALUD ANIMAL	Vol. 28	No. 1	(2006)
Journal of Applied Genetics	Vol. 47	No. 2, 3	(2006)
ACTA SOCIETATIS BOTANICORUM POLONIAE	Vol. 75	No. 3	(2006)
PROCEEDING OF THE INDIAN NATIONAL SCIENCE ACADEMY	Vol. 71, 72	No. 2	(2005, 2006)
folia biologica	Vol. 53	No. 3, 4	(2005)
folia biologica	Vol. 54	No. 1, 2, 3, 4	(2006)
Acta zoologica cracoviensia	Vol. 49	No. 1, 2	(2006)

(鈴木真有美)

GSJコミュニケーションズ4年間の歩み (03・2～06・12)

「GSJ コミュニケーションズ」は、遺伝学関係者のコミュニティー交流の場を目指し従来の「本会記事」を引き継いで、2003年2月に遺伝学会幹事会責任編集のもとに刊行が始まりました。そして早くも4年が過ぎます。この間、編集者の執筆依頼に遺伝学会会員のみならず会員でない方々からもこころよく応じてご寄稿下さいました。皆様に深くお礼を申し上げます。学会運営に関する会議報告や連絡事項が多い中であって、興味深い数々の読み物を掲載でき、いつしか会員から毎号が心待ちにされるようになって来ました。これもおとえに会員を思う執筆者の気持ち、会員の胸に響いたのだと受け止めております。年齢や場所を超えた同好の士の交流の場としてささやかながらも役立ちましたことは、編集者として大変うれしく思っております。

この節目に、過去4年間掲載しましたものから、論説、エッセーなどを中心に掲載年月の時間軸に沿って目次を振り返り目録として採録しておきたいと思います。今もおその文章は、遺伝学の魅力を語り続けています。新しい会員のみならず広く遺伝学に関心のある皆様への情報提供の一助となれば幸いです。ご希望に応じて、学会ホームページなどを通じてウェブ化されることも可能だと思います。あらためて読んでみたい記事がございましたら事務局にご相談下さい。(石和貞男)

2003年2月 78巻1号

『思い出の一編』	萩原保成 17
『編集者への手紙』	辻本 寿 18

2003年4月 78巻2号

〔追悼〕 川村智治郎先生を偲んで	西岡みどり 3
日本学術会議の在り方について【概要】	森脇学術会議員 5
国際シンポジウム：3R—その誕生と成長	品川日出夫 6
GSJ サロン 『思い出の2編—色素細胞三昧』	山本博章 11
〈私の遺伝学講義ノート紹介〉	山本和生／布山喜章／池内達郎 16
遺伝学に魅せられて	
「ベストペーパーズ賞第一回（2001）受賞者からの便り」	佐渡 敬／森山陽介 20

2003年6月 78巻3号

GSJ 論壇 巨大科学としての生物学	城石俊彦 3
青春の夢と矜持	岡田典弘 5
色覚バリアフリー運動の広がり、社会における	
科学者の役割	伊藤 啓 7
日本ショウジョウバエ研究会第6回研究集会と	
第2回日韓シンポジウムの開催について	松浦悦子 8
付録 遺伝学関連の学協会の大大会・	
研究会データ集（2003年）	10
GSJ サロン 『マウスからヒト、ショウジョウバエ、	
そしてワイルドライフ（ニホンジカなど）へ』	玉手英利 20
遺伝学講義ノート紹介 その2 生島隆治／斎藤成也	21
BP 賞講演者からの手紙	
貴島裕治／若生俊行／中村太郎／森田裕将	24

2003年8月 78巻4号

巻頭言 遺伝学会に何を求めるか	関口睦夫 3
2003夏 国際会議レポート	
・メルボルンで考えたこと	館野義男 5
・国際センチュウ会議（カリフォルニア）レポート	稲田 仁 6
・国際酵母遺伝学（スウェーデン）に参加して思ったこと	品川日出夫 8
・サルジニア国際会議『複合疾患と隔離集団の遺伝学』	安田徳一 10
GSJ サロン	
「原点」	郷 通子 12
ネブラスカ大学に着任して	森山悦子 13
BP 賞第1回受賞者からの手紙シリーズ	4
「ゲノムシーケンズ決定前後の <i>C. elegans</i>	
研究にたずさわって」	笹倉寛之 15
「効率よく正確に DNA 複製を完了するために DNA	
相同組換えが重要な役割をもつ」	菱田 卓 16
特集 「これからの遺伝学」 遺伝学研連企画	
合同シンポジウム（8／7，8）	
<講演要旨>	
挨拶	森脇和郎 17
遺伝学の魅力	石和貞男 17
ゲノム科学と遺伝学	林崎良英 17
エピジェネティクスと個体発生	佐々木裕之 18
ゲノム遺伝学：ゲノム配列に潜む生物種の個性	池村淑道 18
新しい遺伝学と倫理観	米本昌平 19
喫煙と遺伝子多型そして肺がんリスク	鎌滝哲也 20
文明と遺伝	武田和義 20
日本の医学教育における遺伝学の欠如と	
その改革への提言	武部 啓 21

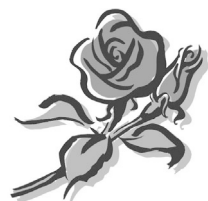
GSJ 論壇 高校「生物」での遺伝教育の現状と問題点 —専門家と教育関係者の協力が今迄になく 強く望まれている—	池内達郎	25	近況報告	小関治男	10
2003年10月 78巻 5号 (BP 賞特集号)			回想の遺伝学雑誌	石川辰夫	11
2003年12月 78巻 6号			第58回日本遺伝学会大会の回想	大澤省三	12
巻頭言 継続は力なり	常脇恒一郎	3	サンフランシスコからご挨拶	由良 隆	14
【国際会議レポート】			遺伝子学栄え	常脇恒一郎	15
International Mouse Genome Conference に出席して			遺伝学会の皆さんへ	大島泰治	16
GSJ サロン 「遺伝学への誘いと遺伝学会アラカルト」	岡 彩子	5	2004年10月 79巻 5号 (BP 賞特集号)		
GSJ フォーラム 遺伝子の退化によるヒトの進化	黒田行昭	7	2004年12月 79巻 6号		
	高畑尚之	12	追悼文 外村 晶先生の死を悼む	佐々木正夫	3
2004年 2月 79巻 1号			追悼文 寶来 聡博士	高畑 尚之	5
巻頭言 生きものに生き方を学ぶ	森脇和郎	3	GSJ サロン 「マディソン留学の思い出」	長岐 清孝	10
2004年 4月 79巻 2号			2005年 2月 80巻 1号		
巻頭言 「大学共同利用機関法人」事始め	堀田凱樹	3	GSJ 論壇 「今こそ「遺伝」を市民のことに」		
GSJ 論壇 遺伝子、DNA はいいが、遺伝はいや	武部 啓	5		武部 啓	5
GSJ フォーラム ネアンデルタールシンポジウムに 参加して	斎藤成也	7	GSJ サロン オタクの夢と生物学	山元大輔	6
GSJ サロン がんばれ遺伝学会	浅見崇比呂	10	遺伝学フォーラム I マウス遺伝学はどこへ行く		
03年 仙台大会ワークショップを振り返る		22		城石俊彦	7
(1) 渡辺正夫・平野博之 (2) 貴島裕治・古賀章彦			遺伝学フォーラム II 古典遺伝学のルネサンス		
(3) 高橋 亮 (4) 真木寿治・片山 勉 (5) 城石俊彦				権藤洋一	9
2004年 6月 79巻 3号			京大公開シンポジウム		
巻頭言 「研究テーマ」を変える楽しみ	杉浦昌弘	3	「擬態と幼形成熟：昆虫の多様性の世界」記録		
GSJ 論壇				岩部直之・星山大介	11
大学院時代の先生の夢を継承できるだろうか？			研究の軌跡ノート ビクトリア湖に「進化」を見た		
	池村淑道	5		岡田典弘	14
国際会議レポート Genomes & Evolution 2004 に 参加して	颯田葉子	7	2005年 4月 80巻 2号		
GSJ サロン (1) 遺伝研に来て思うこと	上田 龍	8	巻頭言 「遺伝学との出会いとその後の展開」		
(2) 倍数性コムギのゲノム解析 —複雑ゲノムのモデル生物？				志村令郎	5
	荻原保成	10	GSJ 論壇 「遺伝学は新しい」	小原雄治	7
GSJ フォーラム			GSJ サロン I 「外国人留学生を受入れて」	河野重行	8
「核の細胞遺伝学」からゲノム解析を武器に			GSJ サロン II 「遺伝学と国際交流」		
「細胞質の細胞遺伝学」の展開へ	黒岩常祥	12	—ユネスコ国際大学院バイオテクノロジー 研修講座の講師として—	原島 俊	10
2004年 8月 79巻 4号			GSJ フォーラム I		
名誉会員からのメッセージ特集			「ショウジョウバエ遺伝資源センターの設立と今後」		
「新しい遺伝学研究の胎動に寄せる手紙」				山本雅敏	13
近況：「日本絹の里」に勤務するまで	田島弥太郎	3	GSJ フォーラム II		
日本遺伝学会と私の研究の関係	大島長造	4	「いま進化遺伝学がおもしろい」	澤村京一	16
チャート係で参加した大学 1 年の42回大会			シンポジウムレポート 「ゲノム動態と環境応答」		
	樋渡宏一	6	—品川日出夫教授退職記念シンポジウム 開催の報告より—	石野良純	18
がんはなぜ起こるのか？	近藤宗平	7	2005年 6月 80巻 3号		
思いつくままに	富澤純一	8	巻頭言 「遺伝学の遺伝 メンデルからブレナーまで」		
胃ガンと向きあって	坂口文吾	9		香川弘昭	3
			GSJ 論壇 「遺伝子増幅から遺伝子進化へ」	堀内 嵩	5
			GSJ サロン I		
			「植物における生物時計と時計が関与する生命現象の 分子機構」		
			〈第77回大会ミニシンポジウムを企画するにあたって〉		
				米田好文	7
			GSJ サロン II 「色素細胞三昧 (その2)」	山本博章	8

GSJフォーラムⅠ「適応戦略としての遺伝子増幅作用」	小林武彦	11
GSJフォーラムⅡ		
「性染色体から染色体構造構築メカニズムの解明へ」	松永幸大	13
国際シンポジウムの紹介		
「ゲノムにとって環境とは何か」		
第9回国際環境変異原学会(9th ICEM)」	能美健彦	14
一般市民の遺伝学リテラシー構築に向けて		
「遺伝アンケート」の調査報告から	福田公子	16
「遺伝アンケート」の調査結果を拝見して	池内達郎	19
2005年8月 80巻4号 (総会資料)		
特別寄稿 Gene, Genome と遺伝子, ゲノム	中村桂子	4
2005年度日本遺伝学会木原賞・奨励賞受賞者紹介		6
2005年10月 80巻5号 (BP賞特集号)		
2005年12月 80巻6号		
巻頭言「目に見えるということ」	下田 親	4
ミーティングレポート		
第15回染色体コロキウム ——植物学と染色体——	山本真紀	13
GSJ フォーラム		
<高等学校における遺伝教育はいかにあるべきか>		
第2回『遺伝教育に関する懇談会』から	向井康比己	17
日本遺伝学会の遺伝学の教育と普及に関する		
特別委員会に参加して	阿知波哲夫	20
2006年2月 81巻1号		
巻頭言「寄り道の効用」	林 茂生	5
GSJ 論壇「ヒトの特異性の進化を探る」	尾本恵市	6
特別寄稿 ある「生物好き」のできるまで	佐藤博文	8
京都大学21世紀COE公開シンポジウム		
「形態と遺伝子から探る生物多様性：収斂・擬態・		
種分化・新規形質」		
(記録) 岩部直之・工樂樹洋・廣瀬 希		15
2006年4月 81巻2号 (第78回大会 特集号)		
2006年6月 81巻3号		
巻頭言「退職雑感」	高橋三保子	3
GSJ 論壇 Barbara vs Nancy : Women in Science	大坪久子	5
特別寄稿		
なぜ「線虫 <i>C. elegans</i> の行動の分子生物学」を研究して		
いるか(遺伝学的方法を使った研究の例として)	桂 勲	7

GSJ フォーラムⅠ「到達目標地点は何処？」	木下 哲	11
GSJ フォーラムⅡ		
ムギ類の染色体を分子細胞遺伝学的に解析しています	那須田周平	12
遺伝カウンセラーからの特別寄稿		
『遺伝カウンセリングって何?』	田村智英子	14
私の海外留学事始め ハーバード便り	郷 康広	16
GSJサロンⅠ		
「宝来 聡 教授 追悼記念誌」の発刊に際して：		
研究者魂を受け継ぐ2人の若手研究者	田辺秀之	18
宝来先生との研究	松井 淳	19
ゲノム医科学研究における「フィールドワーク」	田嶋 敦	19
GSJサロンⅡ		
一般教養としての「ヒトの遺伝」を考える——		
高校「生物」の先生達による研修会に参加して	池内達郎	20

2006年8月 81巻4号 (総会資料集)		
特別寄稿		
学問と科学者について	浅島 誠	4
科学革命としてのヒトゲノム解読：		
その科学的・社会的意味	米本昌平	6
日本遺伝学会木原賞・奨励賞(2006年度)受賞者紹介		8
日本遺伝学会国内名誉会員候補者紹介(三浦謹一郎会員)		14
2006年10月 81巻5号 (BP賞特集号)		
巻頭言 衆生無辺誓願度と遺伝学	高畑尚之	3
特別寄稿		
「遺伝学やバイオに関するシニア世代の高度な知識の		
活用・継承を実践するバイオ学部教育」について	池村淑道	17
BP賞受賞一般講演(第1回～第5回)総目録		
(内容省略)		

2006年12月 81巻6号		
惜別 大島長造先生のご逝去を悼む	黒田行昭	4
会長挨拶 基礎科学としての遺伝学の振興を訴える	品川日出夫	6
日本遺伝学会第79回大会へのお誘い	香川弘昭	9
特別寄稿		
ショウジョウバエの脳を詳しく調べる	伊藤 啓	17
日本学術会議会員便り	斎藤成也	28



2007年度日本遺伝学会 会費納入についてのお願い

本会の会費は前納をたてまえとしております。2007年度分（Genes & Genetic Systems Vol. 82 を含む）の会費を、納入下さいますようお願いいたします。学生会員の方は在学証明書かそれに代わるもの（振替用紙の通信欄に指導教官などの署名・捺印）をお送り下さい。

1年以上の滞納者は会則第5条によって会員の資格を失いますのでご注意下さい。

記

普通会員	10,000円
学生会員	6,000円
外国会員	10,000円
機関会員	15,000円
賛助会員（1口）	20,000円

〒411-8540 静岡県三島市谷田1111

国立遺伝学研究所内

日本遺伝学会

電話 055-981-6736

FAX 055-981-6736

振替口座番号 00110-7-183404

加入者名 日本遺伝学会

この納入のお願いは本会記事綴じ込みのもので、すでに会費を納入された方にも、お送りいたしております。ご理解のほどお願いいたします。

日本遺伝学会会則

- 第1条 本会は日本遺伝学会と称する。
- 第2条 本会は遺伝に関する研究を奨め、その知識の普及を計ることを目的とする。
- 第3条 本会は事務所を静岡県三島市谷田、国立遺伝学研究所内におく。
- 第4条 本会に入会しようとするものは住所、氏名および職業を明記して本会事務所に申し込むこと。
- 第5条 本会会員は普通会員、機関会員、賛助会員および名誉会員とする。毎年普通会員は会費10,000円（ただし在学証明書またはそれに代わるものを提出したときは6,000円）を、機関会員は15,000円を、賛助会員は1口（20,000円）以上を前納すること。会員で会費滞納1年におよぶものは資格を失うものとする。
- 第6条 本会は次の者を総会の決議により名誉会員とすることができる。
本会に功労のあった者、外国の卓越した遺伝学者。
- 第7条 本会は隔月1回遺伝学雑誌を発行して会員に配布する。
- 第8条 本会は毎年1回大会を開く。大会は総会と講演会とに分け、総会では会務の報告、規則の改正、役員選挙および他の議事を行い講演会では普通会員および名誉会員の研究発表をする。
大会に関する世話は大会委員若干名によって行い、大会委員長は会長が委嘱する。大会は臨時に開くことがある。
- 第9条 本会は各地に談話会をおくことができる。
- 第10条 本会は会長1名、幹事若干名、会計監査2名の役員、および評議員若干名をおく。
1) 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
2) 会長は、評議員が全普通会員の中から選出した複数の候補者から普通会員による直接選挙によって選出される。
3) 評議員は、普通会員による直接選挙で選出される。
4) 幹事は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
5) 会計監査は、会長が推薦する候補会員を評議員の過半数が承認することにより選任される。
6) 会長は評議員会を招集し、その議長を務める。幹事は評議員会に出席するものとする。
7) 評議員会は、会員を代表して、事業計画、経費の収支、予算・決算、学会誌の発行、大会の開催、その他重要事項について審議し、出席評議員の過半数をもって議決する。
8) 会長ならびに幹事により幹事会を構成し、会長がこれを代表する。
9) 幹事会は、学会の関連事項を論議し評議員会に諮ると共に、会務を執行する。
10) 会計監査は、学会の会計を監査する。
- 第11条 役員および評議員の任期は2カ年とする。会長および評議員は連続3選はできない。
- 第12条 本会の事務年度は暦年による。
- 付則 平成7年10月13日に第5条を改正し、平成8年1月1日から施行する。

GGsの発行に関しては平成18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）をうけているので、ここに付記する。

Genes & Genetic Systems 第81巻6号（付録） 2006年12月25日発行 非売品 発行者 石和 貞男・遠藤 隆 印刷所 レタープレス株式会社 Letterpress Co., Ltd. Japan 〒739-1752 広島市安佐北区上深川町809-5番地 電話 082 (844) 7500 FAX 082 (844) 7800 発行所 日本遺伝学会 Genetics Society of Japan 静岡県三島市谷田1111 国立遺伝学研究所内	学会事務取扱 〒411-8540 静岡県三島市谷田・国立遺伝学研究所内 日本遺伝学会 http://www.soc.nii.ac.jp/gsj3/index.html 電話・FAX 055-981-6736 振替口座・00110-7-183404 加入者名・日本遺伝学会 国内庶務、渉外庶務、会計、企画・集会、将来計画、編集などに関する事務上のお問い合わせは、各担当幹事あてご連絡下さい。 乱丁、落丁はお取替えします。
---	--

この冊子に記載してある個人情報については、慎重に取り扱っていただきますようお願いいたします。

Genes & Genetic Systems 目次

(The Genetics Society of Japan)

Volume 81, Number 5	October 2006
Full papers	
Identification and characterization of a second, inducible promoter of <i>relA</i> in <i>Escherichia coli</i>	Akira Nakagawa, Taku Oshima and Hirotada Mori 299
Complete Nucleotide Sequence of the Cotton (<i>Gossypium barbadense</i> L.) Chloroplast Genome with a Comparative Analysis of Sequences among 9 Dicot Plants	Rashid Ismael Hag Ibrahim, Jun-Ichi Azuma and Masahiro Sakamoto 311
Two distinct groups of natural populations of <i>Fagopyrum urophyllum</i> (Bur. et Franch.) Gross revealed by the nucleotide sequence of a noncoding region in chloroplast DNA	Mitsuyo Kawasaki and Ohmi Ohnishi 323
Endogenous retrovirus-related sequences provide an alternative transcript of <i>MCJ</i> genes in human tissues and cancer cells	Ho-Su Sin, Jae-Won Huh, Dae-Soo Kim, Tae-Hong Kim, Hong-Seok Ha, Woo-Yeon Kim, Hee-Kyung Park, Cheol-Min Kim and Heui-Soo Kim 333
Involvement of <i>Drosophila</i> <i>Sir2</i> -like genes in the regulation of life span	Sakiku Kusama, Ryu Ueda, Takeshi Suda, Shoko Nishihara and Etsuko T. Matsuura 341
Short communications	
Overexpression of wheat alternative oxidase gene <i>Waox1a</i> alters respiration capacity and response to reactive oxygen species under low temperature in transgenic <i>Arabidopsis</i>	Atsushi Sugie, Nayden Naydenov, Nobuyuki Mizuno, Chiharu Nakamura and Shigeo Takumi 349
Molecular characterization of two anther-specific genes encoding putative RNA-binding proteins, <i>AtRBP45s</i> , in <i>Arabidopsis thaliana</i>	Jong-In Park, Makoto Endo, Tomohiko Kazama, Hiroshi Saito, Hirokazu Hakozaki, Yoshinobu Takada, Makiko Kawagishi-Kobayashi and Masao Watanabe 355
Sweet Wheat	Toshiki Nakamura, Tomoya Shimbata, Patricia Vrinten, Mika Saito, Junichi Yonemaru, Yasuhiro Seto, Hideyo Yasuda and Masao Takahama 361
Proposed standard nomenclature for the α - and β -globin gene families	Gabriela Aguilera, Joseph P. Bielawski and Ziheng Yang 367
	(GGS 81 (5) より転載)
Volume 81, Number 6	December 2006
Full papers	
Construction of physical map and mapping of chromosomal virulence genes of the biovar 3 <i>Agrobacterium</i> (<i>Rhizobium</i> <i>vitis</i>) strain K-Ag-1	Katsuyuki Tanaka, Henryk Urbanczyk, Hiroki Matsui, Hiroyuki Sawada and Katsunori Suzuki 373
Plasticity of the domain structure in FlgJ, a bacterial protein involved in flagellar rod formation	Takayuki Nambu, Yuji Inagaki and Kazuhiro Kutsukake 381
Isolation of thermotolerant mutants by using proofreading-deficient DNA polymerase δ as an effective mutator in <i>Saccharomyces cerevisiae</i>	Chikashi Shimoda, Akiko Itadani, Akio Sugino and Mitsuru Furusawa 391
Analysis of paternal transmission of mitochondrial DNA in <i>Drosophila</i>	Wushur Sherengul, Rumi Kondo and Etsuko T. Matsuura 399
Abstracts of Papers at the 78th Annual Meeting of the Genetics Society of Japan	405
Subject index, Author index	475
	(GGS 81 (6) より転載)